
過ぎ去りし日々～大学編～

安部由理野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過ぎ去りし日々～大学編～

【NZコード】

N9687K

【作者名】

安部由理野

【あらすじ】

中学からの幼馴染、柿沢友里菜と大久保芳人は高校は別々、そして大学の進路も場所も別々になつていった。音楽家を目指す友里菜は関東、医師を目指す芳人は関西と。物理的に二人の間には距離が立ちはだかる。果たして、この幼馴染の恋のゆくへは？ そして二人の青春は？

1 桜の園（前書き）

離れ離れになつた友里菜と芳人。一人の恋と青春はどうなつっていくのだろう……。

約10年前の4月からの物語です。

過ぎ去りし日々～大学編～

1 桜の園

柿沢友里菜は、憧れの女子大の門をくぐっていた。天気はまあまあの晴れ。

まず最初に友里菜が目にしたのは、淡いピンクのソメイヨシノの花が、学園全体を覆っているメルヘンな風景だった。

やっぱり、女子大は雰囲気が違うわ～。前の高校とは偉い違いや。

「どうしたの、友里ちゃん。足を止めちゃって」

と母方の叔母が、覗きこみながら聞く。

「そうよ、どうしたの？」と叔母の隣の母親もそう尋ねた。

「いや……なんか、嘘みたいで。本当にここに入ったんだなあって思つて」

「か・ん・ど・う？」と叔母が茶化したように言つと、上品に微笑んだ。

「うん、まあそーカな」

友里菜は照れ笑いをしてしまう。

1999年4月の入学式のF女子大は、まるで桜の園だった。校門を目指して、友里菜達だけではなく、様々な新入生達が母親や両親と思しき中年の人々に付き添われてどんどん中に入つて行くのだ。その有様は優雅でかつ壮大、そしてどこか友里菜には気後れする。このF女子大は、明らかに中流から上の家庭の女子生徒ばかりだ

と思われる。あちこちに、控えめに各クラブの先輩達が、これまた控えめに勧誘の看板を持っていたり、チラシを配つたりしていたものの、全体に落ち着いていて全然騒がしくは無く、やはりまごうかたなき“女子大なのだ”という気がするのだ。

そして程なく歩くと、真正面にチャペルがそびえ立つていた。辺りは芝生。そして周りの建物は、どこか古風な修道院を思わせる。それは以前友里菜が付き合つていた、肝付隼人の居たミッション系学園を彷彿とさせるのだ。ここもミッショニン系で、どこか静謐な趣が全体のキャンパスを支配していた。

そう言えば、隼人も今頃そのまま高校と同じ大学に進学したはずだ。彼との思い出は少し酸っぱいが、けれどもいい経験だったとも思う。

でも、やつぱり芳人がいい。芳人……今頃、何してるのかな？
予備校に入ったのかな？

けれどもその思いは、直ぐに打ち破られた。

チャペルの莊厳さ、女子大特有の女性だけの園の甘い雰囲気が、友里菜を酔わせる。入口で、新入生と父母の列と分けられたのだ。これからは一人。そして未知の世界が友里菜を待つ。

入口の新入生用の席には、上級生達が立つて出迎えていた。

「いらっしゃい。あなたの名前は？」

ハキハキした関東弁で、大阪から来た友里菜は少しだけちぢこまつた。けれども、その上級生の物腰は穏やかで、ニッコリと笑い、友里菜の緊張した心をほぐして行く。

「あ、わたしは音楽学部の柿沢友里菜です」

なんと誇らしい響きなのだろう。“音楽学部の柿沢友里菜”……。

まるで突然少女から、大人の女子になつたみたいに。

「ようこそ、柿沢さん。音楽学部の席は右よ。17番の椅子。あの人に案内してもらつて」

指差されたそこには、背の高い美しい上級生が手招いていた。まるで春霞に包まれているような、もうたけた佇まいの人……。友里菜は、同性である女性に対してもうひとりとしたことは、生まれて初めてだつたので、少しだけうろたえた。

「じ、17番です」

「ああ、こつちよ」とその美しいとしか言い様の無い上級生が、微笑みながら友里菜を案内する。まるで夢の中のような気がした。

案内のままに、友里菜は講堂になつてているチャペルのその席に座つた。すぐ右隣には、一人の小柄だが少しふくらした少女が座つており、その少女はチラッと友里菜を見上げた。どこか、ツンとした雰囲気の少女だつた。

「じじが17番」

そう一言告げると、その美しい上級生は去つた。

「あなた、17番?」と隣の席の少女が尋ねた。甘つたれたような、どこか上から目線の言い方だ。

「ええ。あなたは?」

「わたし、16番。あなたも音楽部? ピアノ?」

「いえ、わたしは声楽」

「あれ? 試験の時、あなた居たつけ? わたしも声楽なのよ」

「そうですか? はい、わたし居ましたけど……」

「その言葉、どこか訛りがあるわね」

「大阪から來たので」

「あ、そう」

それだけ聞くと、その少女は真つ直ぐ前を向いたままになつた。

「あの、……貴女のお名前は？わたしは、柿沢友里菜と言います
「え？名前？わたしは、伊藤有紀」

「いとう ゆき？」

「そう。有るといつ字に、何世紀の紀。あなたは？」
「柿の木の柿沢に、友達の友がゆで、里の菜の花の菜で、ゆりな」
「ゆきとゆりな、か」とその少女は少しだけ笑った。笑うと案外可愛く。それが、伊藤有紀との最初の出会いだった。
「名前はね、ABC順になつていてるのよ、ここでは」
と有紀が囁いた。「ミッションでは、大抵そつなのよ。だから、いつも隣になるわね」

桜の花に囲まれたキャンパス。そして、ここはまさに桜の園と言つた趣があった。友里菜はじつと座りながら、まるで夢の中に彷徨つているよつに入学式に臨んだのだった。

1 桜の園（後書き）

過ぎ去りし日々～高校編～からの続きです。やっと一書を始めました。又宜しくお願ひいたします。

2 何もかも違つて

2 何もかも違つて

入学式はパイプ・オルガンの奏楽と共に、厳かに始まった。国旗など何も無く、正面には簡潔な木の十字架と校章があるだけの質素な式かなと思ったのも束の間、背後からオルガンの華やかな音色と、清冽な賛美歌が聞こえて来る。校歌はあつたものの、それよりも賛美歌の調べの方がより勝つっていた。

院長、校長などの祝辞と共に、チャプレンと呼ばれている“学校付き牧師”の短いが意義深い説教があつた。友里菜はただただ驚いて、身体を硬直させて聞いていた。

直ぐ隣の伊藤有紀が、友里菜を少し突いて囁いた。

「あなた……」
「あなた……」
「あなた……」

「え、ええ。ミッションは初めてで。その上、わたし、公立高校出だから」

「ふうん」とだけ有紀は言つと、直ぐ真正面を向く。その横顔は、少しだけだが高慢にも感じる。けれども友里菜はそんなことよりも、この場の雰囲気に完全に呑まれていた。

隼人つて、こいつは雰囲気で育つてたんだ……。道理でどこかわたしらとは違う感じがしてたなあ。

「あなた達は自分の意志でここに来たと思つておられるのでしょうかが、それは違うのです」と背の高い、30代とおぼしきチャプレンが喋つていた。

自分の意志じゃないって？ じゃあ、誰の意思？

「あなた達をここに導いたのは、神です。言わばそれは、約束されていた事なんです」

「神様が！？ ジャあ……それって、運命だつて言うの？」

「いちいち驚いちゃダメよ」と有紀が囁いた。余程友里菜はそれと分かるほど緊張し、又狼狽もしていたのだろうか……。

「うん、分かつた」と友里菜は、頬を赤らめてうなずいた。

式後、叔母と母と共に電車に乗った友里菜は、どこか解放されたような、けれどもワクワクする気持ちを抱きながら語ったのだった。「なんか……何もかも違うんやね～、ミッションの女子大つて。今までずっとと男子と一緒にたから、何か変な気持ちになっちゃつた」

「授業が始まるのは、三日後からだけど、わたしは明日大阪に戻るわ。いい？」

と母親が言った。

「うん」と答えた友里菜だったが、ちょっとびり不安が出て来てしまう。

明日から叔母の家で居候するのだ。余り気が進まなかつたが、とりあえず半年は叔母の家から通う事になった。本当は一人暮らしがしたかったのだが、それも仕方ない。

ピアノが置けるマンションは余り無かつたし、さりとて寄宿舎に入れるのも躊躇われたからだ。

叔母は母の妹で、叔父と結婚しているものの、子供が無かつた。にも係らず、かなりの邸宅で、ピアノもあるし、部屋も8畳の部屋が空いていたからだ。少しでも父母の負担を軽くしてあげたいと、その時は友里菜もそう思っていたのだが……。

少し高級なレストランで食事をした後、三人は横浜の郊外の叔母の家に帰った。

友里菜がホツとして、あてがわれた自室へと戻ると、メールが来ていた。芳人からだ。

『入学式、どうだった？』

直ぐに友里菜はレスをする。

『疲れた。けど、凄く綺麗なキャンパス！通うのが楽しみへへ』

そうだ。今日から芳人も予備校だったんだ……。

大阪の豊中にある予備校では、芳人と羽島淳平が医学部志望クラスに入り、何とか一浪で医学部を目指して席を並べていた。

「メール、どや？ 来てた？」と淳平が芳人の携帯を覗くと、

「うん、まあな」と芳人はニタつく。「楽しそうやな」

「いいなあ。志望校に入った女子は！ お前のカノジョ、音楽家になるん？」

「まあそう言つてたけどな……将来は分からへん」

「離れていたら、その内新しいカレシが出来るんとちやうか？ 気

いつけな、芳人つ。カノジョつて、美人やろ」

「美人つて言うより、賢いつて顔やな。そして……可愛いい」

「ふふん、にやけやがつて。もつ」

淳平は芳人を突いた。

「そら。先生が来たぞ」

との淳平の耳打ちで、芳人はやつと我に返り、携帯の電源を切った。やつて来た新栄ゼミナールの数学の教師は、いがぐり頭の若い教師だったが、開口一番こうのたまたのだった。

「みんな、来てるか！ いいか、最初に言つておく。自分達がエリ

ートではない、と思つものは、即刻ここから出て行け！ 卑しくも、ここ新栄ゼミに来る者は、一般人とは違つといつ認識にたつてもらいたい。

よつて、君達は人の上に立つエリート集団である。以後、そのつもりで。いいな！！

全員が呆気に取られていたが、やがて、

「は、はい」

「あー、はい」と言う間の抜けた返事が返ってきた。

「何だあ、その返事は。日本人男子たるもの、もつとちゃんと返事せんかい！」

とがなる教師に、生徒達は一斉に「はいっ！」と答えたのだった。

この高橋という数学教師に対して、芳人はふと奇妙な違和感を覚えた。けれども、四の五の言つていられない。確かに、そのような気構えが無ければ、この受験戦争は勝ち残つていけないかもしだいのだ。

芳人の家はまあまあの中流なのが、淳平のように財政豊かな家でもない。よつて、どうにかして、国立か公立の医科大学に入らなければならぬのだ。自分の為にも、そして友里菜という女性を射止める為にも……。

けど、何か想像とは違つたな。僕ら、右翼的エリート集団じゃないと思うんやけどな、医者つて。僕は甘いのかな？

それが芳人にとっての鬼教師、高橋先生との出会いだった。

3 クラスマート達

3 クラスマート達

友里菜は最初の登校日から、常にキヨトキヨトと落ち着かなかつた。

遅刻せずに無事に着いたものの、自分の部屋に行き着くのになまず一度は迷つて失敗してしまつた。

音楽学部の一年生は、同じ部屋だつた。そこは大部屋と呼ばれていて、部屋の中に楽器を置く場所と椅子と大きなテーブル、各自のロッカーがある。廊下にロッカーがあつた高校とはえらい違いで、それからして友里菜はどうして良いか分からぬのだ。

「柿沢さん」と背後から呼ばれて、友里菜は振り向いた。そこには見知らぬ生徒が居た。色白で背が高い。

「柿沢さんよね」

「ええ、はい」

「わたしは、長渕響子。響くと書いて、響子と呼ぶの」

「ん。なんか、音楽的な名前ですね」

「まあね」と響子は言う。「あなた、関西から?」

「ええ」

「わたしは、福島。会津よ」

「会津?なんか、遠い所ですね」

「でもないわよ。福島だけど、中通りや浜通りじゃないから、会津

だからね会津

「中通り?浜通り?」

友里菜には何が何だか分からぬ。響子は訝しげな友里菜にイライラしたようだが、フーッと吐息を漏らした。

「ま、いいわ。わたし達、どちらも声楽で他所から来たつてことは一緒にね」

「ええ」

そう言いつつ、響子の言葉にどこか微かな訛りがあるのに気付いた。けれども、友里菜にも関西訛りがあるのかも知れないのだ。友里菜はそれについては黙つていた。ふと気がつくと、隣には例の有紀が居て、ニンマリと微笑んでいた。

「あ、伊藤さん、お早う」

「お早う。早速友達出来た？　ああ、あなた達、関東の人間じゃないんだ。どちらも」

そう言いつと、有紀は離れていった。

「なんか、やな感じね、あの人」

「でも、同じ声楽なんでしょう？」

「みたい。あの人、結構キンキンした高い声してたわ。わたしはあなたと同じリリックな声なの。覚えてない？」試験の時

「ああ……いいえ……ごめんなさい。覚えてない。わたし、必死だったから……」

「わたしは覚えているわよ、あなたのこと」

「あら？　ありがとう」

友里菜はどこか嬉しくなつた。

それから一人は、配られた資料を基に、何の科目を選択すべきかあれこれ思案していた。その内にクラス中の生徒達が集まつてきて、あれこれ喋くり始めた。

その響きはざわざわした柔らかいトーンで、どこにも低いだみ声は無く、ここが女子大である事を思い出させてしまう。

時々、重そうなコントラバスを運んで来る生徒や、如何にも高そうなバイオリンケースを持つて、にぎにぎしくやって来る生徒も居

たが、全てが女子ばかりである」とだが、友里菜には不思議に感じる。

暫くすると、自然にグループが出来ていた。不思議な事だが、それが「ぐぐく」自然になのだ。友里菜と会津から来たと言つ響子は、ふと気付くともう一人の声楽の女子達と一緒にになって、ペちゃくちやとお喋りしていたのだ。

「もう直ぐ礼拝の時間だつて！ それからは自由時間で、明日までに選択して登録しなくちゃ」と小柄な女子が甲高い声で言つた。

「それにしても、広いキャンパス！ ここね、英文と社会学部の教養は無いんだつて。別の場所らしいよお」と福岡から来たと言つ女子が囁いた。

「もう一つのキャンパスは、ちょっと遠いよね」と響子も相槌を打つ。「わたしは、こここのキャンパス内の寮に居るんだ」「東寮？ それとも、西寮？」

「東」と響子は短く答える。「門限は10時だつて」「はー、今時10時なんて、コンサートはどうするよ

「その時は、寮長に予め外出許可を提出するのよ

「わー、なんか修道院じやん、まるで」

「だつて……修道院でしょ？ この雰囲気つて

「わはははは。言えてる言えてる」

女子達のお喋りは果てしなく続くよう、友里菜には思われた。そしていつの間にか、自分もそのお喋りに加わっているのだ。不思議な感覚だった。今までに味わった事の無いような、奇妙な感じ……。

これが女子大なのか……。男の陰が無く、屈託が無い、そんな雰囲気。友里菜はそう思つと、ふつと微笑んだ。そうか、これが女子大なんだと。

4 地獄への扉？

4 地獄への扉？

医学部コースは国語や地歴はない。英数理、それも理科の内二科目を選択しなければならないのだ。地歴が好きだった芳人は、何か割り切れないものを感じていた。その上、予備校は過酷を極め、5月を待たず、すぐにへとへとになった。

それは淳平も同じ様子だった。

ある日、予備校が終わった後、一人はふらりとマクドに寄つて、今まで溜め込んでいた愚痴を散々言い合つた。

「ああ、僕ら20歳になつたら、思い切り酒を飲み明かしたいがな、な、淳平」

「どーも予備校の奴ら、好きになれへんなあ」と淳平もぶーたれた。「女断ち、遊び絶ち、か。あ、それからゲームも！ もうお、それやつたら人生楽しみなんか、何もないやんか」

「欲しがりません、勝つまでは！」やで、芳人」

そう言うと、小柄な淳平はハンバーガーに喰らいついた。華奢なのにも係らず、案外淳平は痩せの大食いなのだ。

「ああ、腹減つたな）。けど、なんか味気ない」と芳人は愚痴る。

「そう言えば芳人、カノジョの方が先に大学卒業するけど、大丈夫かあ？」

「何が大丈夫かあ、やねん？」

「先にカノジョが大人になつて、もうお前を待つのがやになつて、て言うか、痺れ切らしてもうて、“もう、あんたなんか待てへんわ”って言われるんとちゃう？」

「うん、それが問題やな」と芳人は妙に同意した。

「以前は、友里菜の方が子供っぽいと思つていたけど、なんせ女子大になんか行つてもうたら、もつすつかり大人びて、僕みたいのは相手にされんかも」

「心配か、芳人」

「ああ、ちょっとぴりね」

「大丈夫やで。医者になつたら、女の子達がわんさと寄つて来るつて」

「そんな簡単なもんや無いと、僕は思うんやけどな～」

「確かにね」と淳平は、急に大人びた顔付きになつて相槌を打つた。
「親父なんか見ていると、ほんま大変やもん。お袋なんか、医者と結婚したから、遊んで暮らせると勘違いしてたんやつて。けど、ほんまは物凄く大変で、朝は早いし夜は遅いし、若い頃は週一ぐらいで当直があつて、家には帰れんかつたし。騙された、と言つてた」「ははは！ それはとんだこつちや」と芳人は嗤つた。

「親父さんは、確か内科？ 外科？」

「本当は外科。あんな、医学部では成績のいい奴は内科、ボーッとしている奴が外科なんやて。テレビでやるんは、ほとんど外科医がむづ～い手術をパツパツとやつてカッコよさそうやけど、ほんまは違うんや。外科はほんま、大変やで。せやから親父は、僕に絶対に産婦人科と外科にはなるなつて」

「そんなもん？」と芳人は二つ目のハンバーガーを食べながら聞く。

「僕んちには、医者はおらんからなあ

「芳人は純粋やな

「なんやて？」

「純粋なんや。羨ましいほど。僕んちは、親父の跡を継げとかそういうしがらみがあるけど、お前は純粋に医者になりたいって思った。

それも、病氣のオカンを見てそつ志望したんや。僕から見たら、ほんま立派や」

それから淳平は一タリと嘘つた。

「けど、二つか後悔するでえ。僕は他の職業になりたかったな

「後悔する？」

「うん、まじで」

「そりがなあ。医者は大変そうやけど、人の命を救うんやで」
「けど、助からへん患者の方もぎょうさん居るんや。そういう患者さん最後を看取るのも、医者やで。坊さんは、全てが終わってからあとから来るだけや、といつも親父はブツクサ言つとるけど、それはほんまや」

「うーん、因果な商売やなー」

「その上、あんまり休みも取れへん」

「そりがなー」

「お袋なんか、いつか暇になつたら、一人で世界一周の船旅しようと、いつも言つてるけど、それが実現できるかどうかも分からへん

「おいつ、淳平。そんなん知つてんのに、なんでお前も医者になるねん？」

「うん……それはやなー」と淳平は一瞬口ごもつた。「やつぱ、親父を尊敬してるつちゅーかな」

「へええ？」と芳人は淳平の顔をまじまじと見つめた。

「地獄を天国に変えたいつていうかなー」

「お前、結構まじやんか」

「ん、まあそりがなー。そうでないと、この地獄の特訓なんか毎日出来へんわ」

淳平は、へへへと照れ笑いした。芳人は淳平の本心を知つて、心から嬉しいと感じた。一人は幸せそうに、ハンバーガーを食べ続けた。夢だけが、二人を優しく包んでいく。

5 正しいお化粧の方法？

5 正しいお化粧の方法？

友里菜はやつと選択科目を決めて提出した。
ある昼休み、

「へー、キリスト教学つて、一、二年は必須科目なんだ」と友里菜が呟いていた。

「そうよ」と有紀が当たり前に横から言った。「わたし、高校はカトリックだったからね～、夏休みとかは必ずどこかの教会の礼拝に出なきゃなんなかつたのよ。もひづかくてさ。けど、結構新鮮だつたけど」

「そつそ、あたしのところもそつだつた」

と福岡から来たという、末松規子も相槌を打つた。

「そつなのかな」と友里菜は新しい発見をする。「わたしの高校は府立だから……夏休みでも何も無かつたし」

「その点、公立はお気楽よね」と有紀。嫌味ではないのだが、どこか高慢ちきな響きを持つのが欠点と言えば欠点の有紀だ。

「ん、まあね」と友里菜はいい加減に答えると、近寄つて来た響子と一緒に食堂に出かけた。

この頃では、自然とグループが出来ていた。地方出身の女子と、在京の女子達。そして声楽、ピアノ、バイオリン、管楽器、作曲理論、という各科でも又グループがあり、女子達は大抵はどこかのグループと行動しているようになつていた。

友里菜は地方出身の声楽グループに属してはいたが、それも何となくだつた。いつも顔を合わせるし、先生達との共通点も多いからだ。

友里菜と有紀は、佐藤教授の担任の生徒になつた。ソプラノの佐藤教授は、もう60のぐらじの年配で、ijiではかなり上の方だと言つ。受験前にお世話をなつていた山際冴子はその佐藤教授の弟子で、まだ助教授だつたのだ。

「良かったわね、あの先生になつて。それつて有望と言つて証拠なのよ」と冴子は言つと、一ヶ口こと友里菜に微笑んだ。

けれどもやはり友里菜は最初のレッスンで緊張してしまい、余り巧く声が出ないでいた。

「レッスンには時間通り来る事。そしてちゃんと予習してきてちょうだい」

と佐藤教授はだみ声で言つた。地声はそつなのだが、実際に歌い出すと全然違う甲高い声だ。その上、いつも髪の手入れが行き届いており、今時珍しくアップをしている。

「それともう一つ。服装や身なりはきちんとしておく」と。絶対に今時のジーンズでは、あたしはレッスン致しませんからね

言葉は柔らかいものの、その聲音は恐ろしく響いた。

「つて言われちゃつた、わたし」と友里菜が冴子に言つと、

「当たり前だよ。当然つ！」と意外にも響子が同意したのだ。

「え、なぜ？ 今時、そんな服装まで言われるのつて変やない？」

「柿沢ちゃん、わたし達声楽する学生がどんなものかって、気付いていないんじやない？」

と響子は甘えたような、又拗ねたような言葉を並べた。

「それつてどういう意味？」

「歌を歌うのつてね、観客の正面に立つでしょ？ その時に観客は、歌の中に夢や美や愛を感じていくの」

「何か……むずいー」

響子はあくあと溜息を付いた。

「わたしまあ、会津では一、二を争うブチックでいつも服を買ってたのよ」

「はああ？」

確かに響子は開業医の娘で、お金は有り余るほど有りそつだったが……。けれどもそれが？

「つまりさあ」と響子はじれつたそうに言い始めた。「柿沢さん、あんたつてさ、どつかダサくない？」

「ダサい！？」

それはショッキングな言葉だった。なぜなら、芳人も隼人も自分に向かつてそんなことは言わなかつたからだ。

随分、失礼じやんそれつて。

「清楚なのはいいけどさあ、もつと女っぽくめかし込んだほうがいいと思うのよ。元々、素材がいいんだから、もつたいなくない？」「素材がいい……！？」

「そうよ。今度わたしと一緒にお化粧品とか服とか買いに行かない？渋谷とか、六本木とか銀座とか。そもそも、原宿はダメ。あそこはおのぼりのガキが一杯だから」

と響子は自分も地方出身なのに、そうのたまたた。

「で、お化粧方法とか教えてあげる。あんたオンナをあげなくちゃダメでしょ。せつかく青春しているのに」

「余り派手なのは、大阪のカレシが嫌がる」

「あら！ 柿沢さん、カレシがもう居たんだ！」

と響子は素つ頓狂な声を張り上げた。

「そんなに大きな声で言わないでよっ！」

「分かつた分かつた。そつかー、もう居たかー。でもだつたらもつ

ともつと美しくなりたくない?」

「でもさ、お金が……」

「そんなもん! テクニックよ、テクニック」

「あなた達、そんなことよりも、今年度からパソコンに教授達がスケジュールを送信するって言つてたわよ。ちゃんとパソコン動いてんの?」

と突然横から声を掛けたのは、なんと有紀だった。有紀は重そうなノートパソコンを持っていたが、それを見て、友里菜も父から譲り受けたお古のWINDOWS 98のパソコンを思い出していた。

「そや! わたし……勉強しに、大学に入ったんやなかつた? それなのに、正しいお化粧方法なんて! けどやつぱり気になる。わたしのお化粧って、ダサいのかな?」

つまらないことで日々思い悩む友里菜だったのだ。

6 初合コン

6 初合コン

五月生まれの友里菜には、“五月病”といつもの無い。けれども、その頃には何人かの学生達が“五月病”らしきものに掛かっていたのだ。

ちょうどその頃に、GWと言つ連休のおかげで、一部の生徒は実家にしばし戻り、そしてそうでない学生達は青春を謳歌することになる。

友里菜は大阪の実家には戻らなかつた。

友里菜の母の妹である村越歩の家に下宿していた友里菜は、歩が少し苛々している事に気付かなかつた。鈍感と言えばそれまでだが、子供の居ない夫婦にとって、ふいに下宿人が増えるというのは、例えそれが甥や姪であつても、うざいものなのだ。

けれども叔母の歩も、そうだとは姉の娘に向つては言い辛い。

「ねえ友里ちゃん」とある口歩は囁いた。

「はい、何でしじう?」とピアノを弾いたばかりの友里菜が、無邪気に問うので、ついつい歩は言いそびれてしまう。

「あなた……もちろん連休には大阪に戻るのよね?」

「はあ? いいえ、戻りません」

「え、そう?」と歩は動搖と失望を押し隠しながら、さり気なさを裝う。

「あ! わたし、お邪魔ですか?」

「い、いえ、そんなことないのよ。別に……」

けれども歩の狼狽振りは、さすがの友里菜にも分かつた。歩叔母はいい人なのだが、やはり友里菜が居ると荷が重いのだろうか……。

「叔母さん？ どこかへ行きたいのなら、わたしに構わなくつてい
いんですよ。」

「いいえ、そうじゃなくて……」

「わたしもわたしで、合コンに誘われているんで。だからちょくち
ょく出かけるし」

「やうなの？ ジャあ楽しんできてね」と歩はやつと静かに微笑ん
だ。

それはあながち嘘ではなかつた。実は友里菜は、一いつの合コンに
誘われていたのだ。芳人というカレシが大阪に居る身としては、そ
う簡単に受けたくなかったというのに、友里菜は生返事をしてた
のだつた。

まして歩がそういう気持ちなのなら、尚更自分は合コンに行かな
くてはならない、それは義務なのだと友里菜は考へ、直ぐにそれを、
一つの合コンの言い出しつべの末松規子に電話した。

それから次に、数日前に入部した『美術クラブ』の部長、有吉美
央みお規子ありよしにも連絡したのだつた。

どちらも、友里菜が承知するとは思つていなかつたらしい。どちらもびっくりしていたが、反面喜んでもいた。

「あ、友里菜」（今では、友里菜は名前で呼ばれていた）、本当に
いいの？ 大阪帰らなくて。カレシ、居るんでしょ？ 会いたくな
い？」と規子が念を押すと、

「会いたいけど、戻つてもあつちは勉強とかテストばかりでわたし
と会つ暇なんか無いわよ、のりつち（規子は今ではこう呼ばれてい
た！？）」

「そつかー、カレシつてまだ予備校生だつたんだよね」

「のりつちは博多に帰らないの？」

「うん、戻らんと（＝戻らないの）。遠いしさ、別にいいもん。そ

れよか、いいカレシをこっちで見つけんとね」

「ま、わたしはただ出るだけだよ」

「それでいいよ、友里菜は。ただ花を添えてくれるだけで。でもう……もしかしていい人が出てきたらどうする?」

「そんな人、居ないよ」

「はいはい、分かりましたよ。又のろけられた」

とのりつちこと規子は言つと、ピッヂを切つた。

規子がアレンジした合コンの翌日は、『美術クラブ』の合コンで、結構忙しかつたが、友里菜はルンルンしていた。叔母の家にだらだらとは居られないという思いがあり、やはりなるだけ外に出たかつたのだ。

「S大学の美術部だよ、柿沢さんつー出ない手は無いわよ。みんなイケメン揃いつて言つ話だから」

「つて、あのう、有吉さん、会つたことあるんですか?」

「それが……ない」と美央はあつさりのたまたた。

「だつてそれじゃ……」

「天下のS大学だよ。イケメンばかりに決まってるじゃん、とあたしはそう聞いた」

美央の言い方はどうもいい加減だ。けれども友里菜はどうでも良かつた。芳人よりいい人がいるはずが無い、と友里菜はその時までそう思つていたからだ。

「まあ、聞いただけならなんとでも言えますよねー。でも行きます」

「それでこそ、我が後輩だよー」と美央は朗らかに言つた。女の園では、先輩後輩はしつかり守られてはいるものの、どこかほんわかムードが常に漂つっていて、その点についても友里菜は新鮮だったのだ。

その頃、大阪では……。

「ハ、ハ、ハックショーン！！」と騒々しく芳人がクシャミをし、鬼の高橋先生にジロリと睨まれていたのだつた。

「おいおい芳人お、今頃風邪？」

と淳平が囁く。

「いや、ちゃうけどなあ」

「だつたら……あれか？ カノジョが浮氣してるとかあ？」

「まっさか」

「おいつ、そここの羽島と大久保。何こそこそ言つてんのや！ 私語を慎め！ 今は勉強だけや～～！ 分かつたな！」と高橋先生の怒鳴り声が予備校の教室に響いた。

「はい、分かりました」

「はい、以後気をつけます」

と同時に一人は謝る。どうやら、大阪の春はまだまだずーーっと先のようだ……。

7 数々の出会い

五月の連休のある日、クラスメートの末松規子、通称“のりっち”に誘われた合コンが渋谷であった。

友里菜とのりっち、そしてもう一人フルート科の本庄アンナの三人が、予定されていたビルの三階の会場に入ると、そこは既に学生と思しき若者達で超満員だった。

「な～んだ！ この混雑つてなによ！」とアンナは、呆れたように友里菜に囁くが、喧騒で聞こえない。

「立食パーティとは聞いていたけど、こんなに大勢だとは……」とのりっちも躊躇いがちだ。

「ざつと見て、大したイケメン居ないじゃん」

「でも、アンナ、ここにいる男子はみんな東京六大学か、それに準じる男子達ばかりなんだってよお」

「……のようには見えないじやん」とあくまでもアンナはおかんむりだ。本庄アンナは、両親ともクリスチヤンなので、聖書から名前を付けられたらしいが、本人は迷惑がつっていた。おまけにアンナは都内に暮らしている、生粋の“お嬢様”だつたし、見た目もファッショングもお嬢様ルックで固めているのだ。

それに反して、友里菜は申し訳程度の黒のプルオーバーに白のティアードスカート、そして、のりっちは、超ど派手な花柄模様の服だ。

三人は勝手が分からずウロウロしていた。

「ねえねえカノジョ達い」と言つ浮ついた声で振り返ると、同じく三人の男子が立つており、その内眼鏡を掛けた一人が呼びかけたの

だ。

「はい？ なんでしょ」とのりつち。

「君達……どこの大学？ てか、ひよつとして女子大？」

「ええ、わたし達、横浜のF女子大の音楽学部」

「ひょ、音楽やつてんの？ もち、クラシックだよね～」

「もう一人が背後から口を差し挟んだ。

「当たり前じやん」とアンナは不機嫌そうに答える。「F女子大が、演歌とかポップとかやると思う？」

「いやあ、すみません」とその男子は軽く受け流した。

「僕ら、K大学なんつす。一緒になんか話しません？」

「K大学かあ」とのりつちは、あとの一人に目配せして、顔を寄せた。

「ねえねえK大学つて、まあ良くない？ 一緒になんか喋つたりする？」

「もうこいつらに決めるの？」とプライドの高いアンナは不服だ。

「T大とか、T工大とか、S大とか居ないの？」

「さあね……でもとりあえず、K大ならいいんじゃない？ ねえ、友里菜、どう思う？」

とのりつちは友里菜に振った。

「さあ、わたしは誰でもいいけど……」

その言葉は本当だつた。目の前の、如何にもお坊ちゃん風のK大生達を見ても、可も無く不可もないという感じだつたのだ。

「じゃあ、決まり。彼らと喋つて、面白くなかったら他の男子にしようよ」

そう言つと、さつさとのりつちはその男子三人と交渉し始めた。「なによお、もうK大でウキウキなんだから、のりつちは。だ、から、地方出身の女子は、K大とかにもう直ぐめろめろになつち

やうんだ

とアンナは不満そうに、友里菜に囁いた。

「あの……わたしも地方出身だけだ

「あら？ 関西は違うわよ。特に京都とかはさ～。時々京都に行くけど、歴史があるじやん、歴史が。悔しいけど、江戸よりもね」

「は、はあああ？」と友里菜はもう一つ、アンナの精神構造が読めない。

「それに、友里菜つてセンスいいもの。大阪にしては、さ。関西訛りも少ないし」

「はあ……」

友里菜は何と答えていいか分からぬ。

とにかくこちらの三人と、K大学の三人は丸いテーブルを囲んで互いに座った。

友里菜の目の前には、少し大人しそうな小柄な男子が座っていたが、その男子はチラチラと友里菜を見つめている。

「あのう」と二人は同時に言い出した。

「あ、お先にどうぞ」と友里菜が促すと、その男子は思いがけないことを言い出した。

「僕、名前は大滝洋平。太平洋の洋に平らと書いて、洋平。実は関西から來たんです。姫路から。知つてます？ あの、柿沢さんでしたっけ、貴方も関西から來たんですね」

「ええ？ どうして分かるの？ もちろん、姫路は知つてるけど。

一度姫路城にも行つたしね～」

「やつぱり！ なんかね、臭うんですよね～。それに微かに訛りがあつて。いや……微かに、ですよ。柿沢さんって、ほとんど標準語だから

「標準語つて言い方、好きになれへん」と思わず友里菜は言つてから、恥ずかしそうに俯いた。

「あ、言つちやつた」

「良いんじやないつすか。僕、そういう響き、懐かしいんで」

「大滝さんつて、現役？」

「あ、僕？ 僕は実は2年生」

「一回生か

「その言い方、関西らしく」

「え？ そうなのあ」

「僕は、いつこ上ですね～」

「いつこ？ ああ、一年学年上つてことね」

「慣れないので？」

「そう簡単には慣れませんよお」と友里菜は答えてから、くすりと嗤つた。相手が関西人なので、どこか緊張感が消えていくのだ。大滝の見た目はおせじでもイケメンではなかつたが、けれどもどこか人懐つこい穏やかな雰囲気の男子だ。

ふと見ると、あとの二人もいつの間にかペアになつていた。

「一こ、東京私大連合のパーティなんつす」と大滝が言つと、隣で座つていた地獄耳のアンナが、溜息を付いた。

「な～んだ、国公立大生は居ないのかあ」

「済みませんねえ」と不敵な感じの男子が言つた。「けど、俺は都内つすよ」

「あら、そつなのお！？」と嬌声を上げるアンナ。「あたしもよー…

「みんな、結構上手くペアつてるじゃん」とのりつちが言つた。

「なんか、三人、上手く行つてますよね～」と最初の眼鏡の男子が相槌を打つた。

「皆さん、結構イケテルし」

「まあつ。冗談が上手いわねえ。うふふふふ」とのりつちが一番乗つている感じだつた。

こうして最初の合コンは、まあまあ成功だった。この六人は、夜更けまで語り合ったり、飲み食いを始めたのだった。

8 またまた、出会いが・・・

8 またまた、出会いが…

初めての合コンがかなり遅くなっていたのだが、友里菜は翌日のもう一つの合コンに出る為に、大滝に謝つて先に戻った。けれども自室へ戻ると、どど~っと疲れが出て、パジャマにも着替えずベッドで爆睡してしまったのだ。

翌日の合コンは夕方からだったので、友里菜はだらしなく一日を過ごし、結局日課にしている練習は何一つ出来なかつた。

クラシック音楽演奏は、一日でも怠るとやはり自分で分かるほど、下手になる。やればやるほど、演奏という物はレベルアップしていくのだ。

友里菜が欠伸をしていると、ケータイが掛かってきた。芳人かと思つたが、アンナだ。

「ふあ~い、アンナ?」

「なによ、寝てたの? もう疲れた?」

「うん……まあね……」

「どうよ、昨日は?」

「ん、まあ……メールの交換はしたけど、別にい」

「でしょ? なのにわ、のりつちつたら、もうあいつに決めたっぽいよ」

「え? カレシにとか?」

「うん。のりつちつて、案外望みが低いんだ」

「じゃなくつて、一人で淋しいんじゃ?」

「気が合つたみたいで、二人でののあとしけこんだ」

「なのお! ? うつそー?」

「そこまでは知らないけど、結構にちやいちやしてたし」

アンナの話は長くなりそうだったので、友里菜は早々に切り上げた。

「あ、わたし……今日も別の合コンがあるんで、アンナは絶句したらしい。
「はあ……友里菜ってやるね。一見楚々としてゐるのにさ」「美術部の先輩に言われちゃたし、お付き合いで」「なの？ ほんと？ 人は見かけに寄らないって言つけど。あたしはちゃんとフルートの練習してんのよお」「じゃね」

そう言つて、友里菜は切つた。

「確かに面倒臭い」

そう呟くと、友里菜は洋服を選び始めた。さすがに昨日と同じ服はまずいだろう。そう考へると、咄嗟に最近買つたピタリとしたボディコンのミニの服を手に取つた。

「あら？ 今日もお出かけ？」と歩が玄関口で聞くので、友里菜は曖昧に答えた。

「うん、ちょっと」

「昨晩は、少し遅かつたんじゃない？」

「ああ。ええと……今日はもつと早めにしまーす」

「若い娘だから、それなりにちゃんとしてよね」

と歩が言う。ゆつたりとだが、どこかきつくな感じるのは、浜つ子特有の醒めた言い方だからだろうか？

この日は六本木だつた。電車では、友里菜は居眠りしていた。

けれども、有吉美央の姿を見つけると目が覚めた。美央は、本当にパーティに臨むかのような、派手なスパンコールの付いた透けた服を着てきたからだ。美央の側には、友里菜と同じ一年生一人が立つていた。一人は普段着にジーンズ、もう一人は自分で縫つたかの

ような個性的な服で、髪が異様に長い。

「遅かつたじゃない！」と美央が言つと、友里菜はペコリとお辞儀をした。

「済みません。昨日も……だつたんで」

「あら、お盛んね～、宮本さんつて見かけに寄らず」と美央はアンナと同じような事を言つ。

「でも、宮本さんつて案外派手なんかも」と一年生の一人、地味な方が言つた。「だつてその服、結構目立つよね」

「じゃ行こ」と美央は後輩を促した。

「今日は少人数よ。A学院大の美術部の野郎達だつてさ。行く所もサテンに毛が生えたようなところで。でもそっちの方が気楽でいいでしょ」

「A学院大ですか」と一人が叫んだ。「垢抜けてる男子が多いのかな～」

「そう聞くよね」ともう一人も同意した。

「いい男子が居るといいけどね」と美央は冷静だ。

約束の場所の六本木の、確かにどこか玄人っぽい飾りのサテンの扉を開けると、そこは又昨日とは違う雰囲気、違うメンツが座つている。少し薄暗い。

「あ、有吉さん」と一人の男子が立ち上がった。「ニニ、ニニ」「ごめんね、遅くなつて」と美央は大して遅れてもいいのに、そう謝つた。奥には6人の男子が座り、じつとこちらを伺つている。どの男子も同じに見えたのは気のせいだろうか……。とにかく全員雰囲気が同一なのだ。大学のカラーなのかも知れないが。

今この瞬間の友里菜には、芳人に対する“罪悪感”というものが欠落していた。芳人はなぜか遠い存在でしかなく、ちょっとした空白期間や距離というものが、如何に一人の間の支障になつてゐるか、

気付いていないほどに。

ふと友里菜は一人の男子の視線が、自分だけに注がれているのに気付いた。自分だけに……それが何を意味するか、友里菜にはピンときた。友里菜もそつと伺うと、その男子と田が合ひ。爽やかで瘦身の男子が、ふと微笑んだ。

また、……出合つちゃつた。どうしよう。

それは微かな喜びと驚きを秘めたパニックだった。

9 妖艶な従姉

ツーツーツーとケータイは無情に鳴つているだけ。けれども友里

菜は出ない。

「ちえつ、なにしてんねん、友里菜は？ 最近、あつちからも何の連絡も無いやんか」

腹立たしげに芳人はケータイを切つた。メールを出して、そんなにレスは無い。パケットの無い時代なので、しげしげと出せないのが、尚更シヤクだ。

「なんや、芳人、カノジョのこと怒つているんか？」と電車の隣に立つていた淳平が冷やかした。

「べ、別に怒つてなんかいないけど……」

「ほんま？」と淳平は更に小突く。「ほらほらほら、顔が赤くなつてゐるぞ、芳人。カノジョのこと信じられへんのん？」

「そりや……信じてるよ。けど、遠い所やからなあ。この連休にも帰つてきへんし

「やつぱり……疑つてんのやな。けどしゃーないよ。僕ら、まだ予備校生やし。お前が医学生になつたら、カノジョも又振り返るつて！」

「変な慰めはやめてんか」

「むふふふ……」と淳平は意味深な笑いを浮かべながら、「じゅ」と言つて手前の駅で降りた。

何だかもやもやした思いを抱きつつ家の玄関扉を開けると、そこには麗々しい女性の高いヒールのサンダルがあつた。（＊当時、流行っていました）

「あれ？ 誰や？」

不思議に思いながら居間にいると、そこには見慣れぬ若い女性がソファに座つて、母親と笑いあつてゐる。

「誰や……？」と芳人はつぶやく。

「あ、芳人か。美里ちゃんが来てくれはつたで
「美里ちゃん？ ……あ、従姉の美里ちゃんのこと？」

「当たり前やんか。従姉に美里つて子は、一人しかおらんがな」と母親は手を口に当てて笑う。その時、後姿だつた美里が振り返つた。

「あ、芳ちゃん？ 久し振りやね」

芳人は美里を見た瞬間、ハツと身を強張らせた。その余りの変化に、そのろうたけた妖艶な娘が、よもや自分の従姉だつたとは信じられなかつたのだ。

「な、兄さんがしばらく関東に居たけど、戻つて来はつてん」

「そうよ。最近越して來た。今は山崎に居るわ。又よろしゅうな」

「あ……はい」

「なにボーッとしてんねん、芳人は。あ、分かつた。美里ちゃんが余りにも別嬪さんになつたさかい、びっくりしてんねんやろ？ 何しろ、前に会つたんは……」

「もう7年前やよ、叔母さん」と美里は微笑んだ。「ちょうど芳君が……まだ小六やつたから」

「そやね～。時の経つのは、ほんま早いわ」と母親は感慨深そうに相槌を打つ。

「それがね～、あの小学生が今では医大の予備校生なんて！ あの頃、芳君つて結構「ンタやつたさかい」

「中学では、それこそ不良一歩手前やつたし。心配したけど

「それが立派になつたわねえ」

年上の従姉の艶っぽさに、思わず芳人はくらくらしてしまつ。さつきまで友里菜の事ばかり考えていたのに、友里菜は到底この従姉の色っぽさには叶わないと確信する自分が居た。

昔芳人が見ていた美里は、少し年上の高校生のお姉ちゃんつて感じだつた。確かに側に来るとどぎまきしたが、所詮親戚。“女”として見ていた訳ではなく、又美里から見ると芳人は“ただのガキに過ぎない従弟”だつたはずだ。

けれども美里は芳人よりも五つ上の成熟した娘であり、幾ら親戚と言えど、今度は違つた意味でどぎまきしてしまつ。

「いかん、いかん！ 従姉に変な感情を抱くとは！ 僕としたことが、なんてこつた。

けれども芳人のジユニアは奇妙にそそり立つて立つた。芳人は慌てて、

「あ、自室に行く」と叫ぶと、階段を上つていつた。

「芳人！ もう直ぐ夕飯やで！ 一緒に食べよ」な

と階下から母親の声がしたが、芳人は自室で胸を上下させていた。

「あ！ 分かった！」

芳人はどつとベッドに大の字になつて倒れ込んだ。

女は怖い。たつたちよつとの間に、ああまでも変化してしまふ。蝶になつたように……違う、そういう陳腐な表現じゃなくつて！ ただのお姉ちゃんが、妖しいオンナへと憑依するんや。ああ、こわああ。

まっさか、友里菜……あつちでこつこつ風に変化してんのとちやうやうか……。

芳人が要らぬ妄想に懊惱していた時、ドアが突然開いた。

「あ、芳君。寝てたん？」と言つ声は……美里！ 芳人は、こうして寝ながら見上げると、美里はスタイルも抜群だという事が分かつた。それは、親戚として誇らしくもあるが……しかし。

「ああ、いやいや。別に。ただちょっと疲れてもうて」「予備校生は辛いよなあ」

そう言つと、美里は臆面も無く少しづつ近寄つて来たのだった。

10 誘惑？

「芳君……あんた、結構いけてるやんか。背も伸びたし、昔よりぐつと品よくなつたし。昔はアホかと思つてたけど、雅君に似て結構秀才になつたんやなあ。工高と言つたら、この辺では有名校やん」美里はずかずかと入つて来ると、芳人が横になつているベッドの真ん中に座つた。形のいいお尻が、いまや芳人の目の前だ。

「わああ！ 目の毒やがな～。

芳人は煩悶していた。けれどもそんなこととは露知らず、美里は昔のように親しげに、と言つた、ため口でポンポン言いたい事を言つてくる。

「雅君はK大、あんたが医大に入るなんて、叔母さんも幸せもんやわ」

「まだ入つてへんやん」と芳人は子ども扱いされて、仏頂面で答えた。

「あはは、そやな～」と屈託無く美里は笑う。

「それにあんたが医学部志望なんて、ほんま驚いたわ」

「いや……それはやね～」

「分かつてるつて。叔母さんの病氣が原因やろ？」

「いや、それだけやないけどな」

芳人は焦つた。

「そんなことより、美里ちゃん……いや、なんや～、ちゃん付けするのんも、変やなあ」

「べつに。ちやんでもがまへん」

「美里……せ・ん・は」

「あはははは。さんつて言われるのも、むずむずするな～」

「美里さんは、今何してるん？ 確か、東京の大学に進学したと聞いたけどな。あつちで就職してたんとちやうん？」

「いい、ポイントや」と美里は言つた。「就職した。航空会社」

「わあ！ スッチー！？」

「アテンダント、と言つてや。けど、辞めた」

「はあ？」

芳人はやつと起き上がつた。

「なんで？ いい仕事とちやうん？」

「わたしには向いてへんかったみたい。てか……身体壊して、やめちやつた」

「え？ そうなん？ 知らんかったわ」

「結構きついねんで……その、スッチーで仕事はさ」

と美里は静かに言つた。「もともと両親の希望やつたんだやわ。両親の時代は、スッチーで言つのはさ、高給取りやし憧れの的やつたんやで。特にあたしの母なんかは、なりたかつたて言つてた。

でも自分の夢を娘に託した頃は、もう時代が違つててん。フライト・アテンダントなんて、ただのホステスやんか。飲み物注いだり、難癖つける客をなだめたり……あたしね、一日に2回東京と福岡を往復してたんよ。そやのに、それほど給料はよくなくつてさ。おまけに身体壊してしもうて」

美里は俯いて、足を組んだ。芳人から見ると、美里のTシャツのデコルテから胸のふくらみがよく見えてしまつのだ。

わーー、あかん、あかんつて。美里ちゃん。それつてあかんわ！ ……つて、何興奮してんねん、俺？

い。 美里はふと顔を擧げると、芳人の方を見つめた。その目が色っぽ

「でね……辞めた」

「そつか」

芳君、連休中もどこにも行かへんの？」

一
あ
い
や。
だ
つ
て、
塾、
あるじ、

— その前とか、後では時間無いん?
あ、そうかあ。芳君、カノジ

三か居てたんや」

西ノ王也。……而其母一ノ一也。謫東洋也。

帰ってきてんの?」

そう答える芳人も急に淋しくなつて、一ぐ。

「どうか、あたしと行くかあ、芳君？」

「ええつ――――つ！？」と芳人は素つ頓狂な声を出したものの、

「たまには、井上の従姉と一緒に泊めやる？」

「うん」

「田畠也」

「明日！？」

「あかん？」

「ええっと…… 熟帰りじゃダメ？」五時、「うん

「ええよ。北新地で何か美味しいもんでも食べようかな~」

「ええつと、焼肉？」

「ほんま、雰囲気ないなあ）、芳君は。分かった。梅田でなんかい

卷之三

「ああ、任しちゃって。」う見えて、結構貯金してゐるからだ」

「うん、分かつた！」

なぜかウキウキしている自分がいるのに、芳人は驚いていた。

11 美術部のプリンス

11 美術部のプリンス

友里菜は昨日の合コンを思い浮かべていた。自然と、笑みがこぼれてしまつ。それも我ながらちょっとといやらしい笑みなのだ。にひひひと言つた感じの笑み……。

昨日のA学院大学美術部との合コンは、おおむね上手く行つたような気がする。友里菜に視線を注いでいた男子は同じく一年生。けれども、年齢は一つ上だった。

気障というのではない、そして偉ぶつているわけでもない。それなのに、その男子にはどこと無くオーラがあった。芳人とは違う、色白のイケメンだ。

その男子は明らかに友里菜に一番興味を抱いたようだ。それなのに、ただ微笑んでいるだけで、一向に自分からは言いかけない。自己紹介の後、一人がその男子を突いた。

「おいつ、仲本、何か言えよお」

「そうだよ、将来の“美術部”を背負つて立つ逸材だろ？ ほんと、美大にでも行けば良かつたのになあ、仲本」

「てか……美術部のプリンスだよな、仲本は」

「いやあ……“プリンス”には参つたなあ。氷川清じゃないんだから」

仲本というその男子は、意外なことを言つたので、友里菜はちょっと驚いた。外見では、とても演歌のプリンスの名を言つようには見えなかつたからだ。

「僕は……江戸っ子だけど……下町だし」

「葛飾柴又！」と質素、悪く言えばダサい服装の方が叫んだ。

「ん？ いや……寅さんじゃないんだから」と仲本ははにかむ。と言つより、友里菜には、少し気分を害したのを、何とかして面に出すまいと努力しているなという気がした。

「そうよー 将来のA学院大のプリンスに向つて言つ事じゃないわよ」

と美央がたしなめた。「わたし達、F女学院は、そんな言い方はしないものよ

「あ、はいいい」とその女子は小さくなる。

「仲本さん、下の名前は？」

「あ」と仲本は、お世当ての友里菜からそつと離ねられて、しばし困惑つていた。

「ひろゆき…… 寛容の寛に、えつていつ字で、寛^{ひろゆき}。分かる？」

「ええ、分かるわよ。わたしは友里菜」

「ゆりな…… いい響きだね」

そのソフトな言い方や物腰は、とても下町出とは思えない。

けれども結局二人だけで話したのはそこまでで、又みんなでがやがやと喋り始めた。最初はこういうものだろつと、友里菜は合コンの雰囲気を感じていたし、お互に深入りをしなかつたのだ。

そして夜も更けぬ前に、解散になつた。

「残念つ」と例の地味な女子が帰宅途中で呟いた。「いいのが居たのに……わたしには目もくれないんだから」

「仕方ないじやない。あなたが“葛飾柴又”な^づんて言つからよ。幾らなんでも、寅さんは無いでしょ、寅さんは」と美央がやんわりと叱りつける。

「その点、柿沢さんは凄いわね！ 男子の心情を上手く見てるわ」「でもあの男子、なんか分かりにくいですね」「長い黒髪の女子が付け加えた。「プリンスなんだか、下町のお兄

さんだかわけ分かんない」

「確かに」と美央も同意した。「ま、今回はだれもメアドゲットできなかつたみたいね」

「A学院の男子つて、ガード固いよね。ね、柿沢さん？ あなたもゲット出来なかつたんでしょう？」

「案外その気にさせて、じつと奥から見つめているって感じでしたよね」

と友里菜も同調した。「でも、楽しかった～」

「ま、それなりいのよ。あたし達F女は、焦つちやダメなのよ、分かつた？」

皆は解散した。けれども友里菜は、確かに囁きを聞いたのだ。
「いつか、君と……」みたいな言い方だつたが、周りがうるさ過ぎてよく聞こえなかつた。それに振り返ると、寛之はなぜかふつと横を向く。その前の合コンで出会つた大滝洋平とは全然タイプが違うらしい。

けれども明らかに、仲本寛之は自分に夢中だ。きっとそりなんだ！ そう友里菜は確信していた。今では友里菜は、奇妙な自信を持つようになつていた。

夢見るような涼しい瞳を持つ寛之を思い浮かべていたその時、ケータイのメール通知音が鳴つた。

「誰かな？」

開けてみると、それは大滝だつた。

「ああ……確か、メアド交換したつけ」

『由理奈さん いつか会えませんか？』

「なんだよ、これ～。わたしの名前の漢字、間違つてるじゃん！」

友里菜は幾分ガッカリして、その短いメールを見つめていた。レスすべきとどうか、しばらく躊躇つていたが、やつと友里菜は返事を打つた。

『私の名前は 友里菜。由理奈じゃありません。でも考えておきま
す。ありがとうございます』

「ま、これでいいかな」

と友里菜は送信した。翌日友里菜は溜まっていた練習を狂ったよう
にやり出した。自分が何をしに、ここまでやって来たのかを、やつ
と自覚したからだ。

かくして連休は終わった。大滝からも、仲本からも、そしてなん
と芳人からもメールが来なかつたのだ！ 友里菜は再び自信を喪失
してしまつ……。

12 思わせぶり

12 思わせぶり

従姉の美里とデートらしきものをしてしまった芳人は、友里菜に対してどこか後ろめたかった。親戚だし、別にカノジョをこつそり作つたわけでもないというのに、なぜか自分が許せない。

そんな芳人を淳平は「お前」、案外純情やな」とからかっていた。

「そもそも従姉とは何にもなかつたんやろ」が

「うん、ただ食つただけ。でも何を食べたか思いだせんのや。美里ちゃん、薄物のブラウス着てて、肌にピッタリのキャミが丸見えでな」

それを聞いた淳平は、ハハハハハ」と高笑い。

「お前、うろたえとるつて言つたやないか。そやのに、変な事想像してるやんか。ちゃんと見るとこは見てるし

「やっぱ、俺、男やもん」

「そやな、しゃあないわな。年上の女子は妙に色っぽいから」
「き、禁断症状かも知れんわ。なんか友里菜に連絡し辛くて」「友里菜ちゃんからは？」

「それがさ、あいつからも何も連絡ないんやわ」

「あ、あ、ガタイだけはいいのに、お前ほんま畜の心臓やな。そんなに心配やつたら、横浜に行けよ」

「行けつこないやんか、こんな時に」

「あ！先生が来た」と淳平が囁いたので、二人の会話はそれつきりになつた。もやもやした思いを抱きながらも、芳人は勉強に没頭して行かざるを得ないので。

一方友里菜は、自分がこのクラスでは下から数えた方が早いほど

の成績なのだと気づいていた。この大学では、高校時代は全て“女王様”クラスの女子ばかりが群がっているからだ。けれども、なぜか不思議にここでは友里菜は、高校の時に感じていたような自信のなさや劣等感は感じていなかつた。

同じ大学というだけで、奇妙な一体感がある。女子大だからだろうか？ それとも大学のカラーというのは、確かに存在しているらしい。

けれども、何だかんだと忙しく、友里菜はホツとする暇もなかつた。7月初めには、最初の実技試験があるからだ。

その直前の六月、美術クラブは港にスケッチに行く事になった。初夏で、そろそろ汗ばむ気候だ。梅雨の合間の晴れた日だつた。港に停泊している氷川丸や、その当たりから見える赤レンガ倉庫が見事だ。絶好のスケッチになる。

部員、と言つても10人以下の数人しか参加していなかつたが、各自が各自場所を定めていると、

「ちょっと、ちょっと、柿沢さん」と手招く美央の姿が近寄つて來た。

「あ、はい。何か？」と友里菜は脇にスケッチブックを抱えて駆け寄つた。

「この間の合コンのことだけ……」

「あら？ もう一ヶ月前ですよね」

「そんなに経つかな？」と英文学科のガリ勉の美央は首を捻つたが、すぐに本題に入った。

「ねえ、向こうのA大の部長から連絡があつたんだけど

「へえ？ 何ですか」

「あの……あなたと付き合いたいって男子が居るらしい

「いきなりですか」

「何かメールとか来ない？」

「何にも」

「シャイなのかな、その男子」

「誰ですか？」

「例の人」

「？」

「プリンスさんよ。仲本つていう男子」

「ひええええ～！」

さすがに友里菜は長い吐息を付いた。

「でも……それなら、なんでわたしに直接言わないのかな」

「今時珍しく古風な男子よね～、まったく」と美央も幾らか呆れて
いるようだ。

「それとも、奥ゆかしいって言つのかな」

「その人、直接断られるのが嫌なのかも」

「あら？ 柿沢さん、お断りするんだ」

「い、いえ。そんなこと言つてませんよ～先輩つ

と友里菜は慌てて手を振った。

あのプリンスが……そう思つと、何だか面映い氣がする。そして
どこか誇らしい氣もしてくる。そう言えば、芳人からはメールすら
なく、少し淋しく感じていた所だった。

「じゃどう返事したらいい？」

「そーですねえ」と友里菜は数秒だけ躊躇した。が、すぐ、

「それじゃあ、イエスつて」と答える自分が居た。

「分かった」と美央はあくまでも事務的に答えた。「それじゃわた
しかり言つておくから。柿沢さん、本当にいいのね
「だつて、どうせ軽い気持ちなんでしょ、その男子は」
「さあ～、どうかな～～～」

意味深に言つと、美央は離れて行つた。

その後、友里菜のスケッチはやたらと乱れていた。もはや景色は目に入らない。すうつーと脳裏に入り込むように、仲本寛之の顔を思い浮かべていたからだ。

13 もう一人

13 もう一人

友里菜の頭の中は、仲本寛之一色になつていたその頃、もう一人からメールが来た。

『久し振りです。メールが遅れて済みませんが、色々考えた末、僕と付き合つてくれませんか？ 洋平』

「え？ うつそ～、そんな、今更……」

けれども、仲本からの返事はまだ無い時期で、友里菜は少し苛々していたのだった。仲本が自分をじらしているのでは、と疑いだしたのだ。

そんな時、大滝洋平からのメールだった。

遅いっちゅーのよ！ ほんま、何考へてんのやろ？ けど友里菜、このまんま放つとく？ それとも、二股掛ける？ ……いや、違つた。三股やあ～。どないしょ～？

自分が“悪女”だとは思わないし、オペラ『カルメン』のような尻軽女で、直ぐに乗り換えてしまう女では無いと今迄思い込んでいた。けれども、どうも違つようだ。

わたしも、もうカルメンを噛えない。自分のしていることも、似たりよつたりや。けど、そんなに深入りしていながら救いかな？ 元々わたしは、男子に深入りしたくないし。だって、勉強する為に大学に通つているんやし……。

大学生の目的とは何か……？ 最近の友里菜はそんなことまで思案していたのだ。

「とにかく」と友里菜は自分に言い聞かせた。「別に罪悪感を持つほどのことではないし」

そう無理やり納得させると、メールのレスを打つた。

『わたしも色々考えましたが、軽いお付き合いならいいかなと思いま
す。大滝君はそれでいいですか？ もしもそれでいいのなら。

友里菜

ちょっと躊躇つたが、友里菜はメールを送信した。

「ああっ！ 血迷ったかな、わたし。けどこのケー・タイ、新しいタイプに変えようかな？ 今のつて、折れ曲がるタイプじゃんか。こんな古臭いの、ここ女子大で使っているのは、わたしげらいやわ～」

友里菜は自分の泥臭いケーキを一齧した。

「そうだ！ こんなことよりも、もう直ぐ実技試験だわ～！ ピアノと声楽の試験日、手帳に記しておかなぐちや！ それビニロやないのにい、わたしつて何してんのかしら？」

友里菜はやつと我に返り、ケータイをベッドの上に放り投げると、自室のピアノに向かつた。八畳の部屋とは言え、ベッドと歩のアシ プライト・ピアノを置くと、もうほんとビースペースが無いのだ。

程なくして、友里菜はピアノではモーツアルトのソナタ、そして本命の声楽試験の曲三曲を練習し始めた。窓ガラスは一重だが、けれども思い切り音をたてなければならないので、近所迷惑かも、と以前叔母の歩が夫の村越氏に囁いていたのを、友里菜は気づいていたのだが。

友里菜がベリーーーの一曲を練習していると、ノックする音がした。

入つて

「二二」

すると歩が躊躇いがちに、中に入つて來た。

「何か？」

「あのさあ」と歩は揉み手をしてくる。

「え？」

「今、もう九時でしょ？ 実はね、近所の人から夜は練習やめてつて言われてるの。結構聞こえてんのよ、この辺」

「あ、ごめんなさい。でも今、試験前で……」

「それは分かつてるの。でも……もう少し静かにできないかな～」

「静かに歌うのって……」

それは無理です、と友里菜は心の中で言つたが、「分かりました」と言つてピアノの蓋を閉じた。

「めんね、無理言つて」

「いえ、いいんです。済みませんでした」

「それじゃ」

そう言つと、歩は階下に降りていった。

「ちえつ」と思わず友里菜は舌打ちしてしまつ。

歩が悪気ではないのは知つていたが、このままではやはり親戚の家に居候するのには無理のようだ。独立するか、それとも寮に入るしかない。どつちにしても、又お金が要る。友里菜は両親に對して気が引けたが、それでも夏休みの後にはそうしなければ、自分の学業が続かないのを、嫌と言つほど感じた。

友里菜が腐つていると、ベッドの上のケータイが鳴つた。芳人からだ。

「もしもし、芳人お？」

「はーい、友里菜かあ」

と答える芳人の声は、あつけらかんな響きがする。

「お久しぶりやな～」

「一体、今まで何してたんよ?」

「塾やんか」

「じゃなくつて……何でわたしに電話してくれへんの?」

「友里菜からだつていいいんやけどな」

「でも塾だからつて」と友里菜は今までの腹立しさを、思わず芳人にぶつけていた。

14 やつぱり、芳人が気楽なのに・・・

14 やつぱり、芳人が気楽なのに・・・

芳人はケータイの先からキンキン響いてくる、友里菜のヒステリックな声にまず驚いた。楚々とした雰囲気に似合わず、どこか纖細で荒々しく、且つ又我がままな部分を持つている友里菜だと芳人は知つてはいたが、こうまで刺々しい声音は初めてだ。

まして芳人は、今の友里菜が二股も三股も掛けて居ようとは、知るよしも無い。

「どないしたん？ なんや～、ストレス？ なんかあつたん？」

「いや……そんな事無いけど……」

そう答えた友里菜は、急に目が覚めたようになつて、恥ずかしく感じた。自分の持つ最も嫌らしい部分を、芳人に見せてしまつたのが愚かしい。けれどもそれだけ、友里菜は芳人には正直になれるのだ。

「あ……ごめん」と友里菜は謝つた。「ちょっと、あつて……」

そう言われるだけで、芳人は友里菜がいじらしく感じてくるのだ。恋と言うものは、何でもすぐに忘れ去れるらしい厄介な代物かも知れない……。

「僕も悪かつたよ」と芳人が言つた。「忙しいとか、何とかかんとか言い訳ばかりで。今日日、ケータイとか意志を伝えるのは何でもあると言うのに、ついほつたらかしてて」

「いいのよ。芳人はB型だから、そういうの苦手なのは知つてるから」と友里菜も言い繕つた。

「あのなあ友里菜～、夏休みには大阪に戻るんやろ？」

「当たり前やん」

「何かそつちに染まつてしまつて、もつ帰らへんのかと心配になつてな」

「あほらし。そんな事無いわよ。親だつて心配してるし。それにそつ簡単にこつちに染まるはずが無いやんか」

そう言いつつも、いつの間にか短期間で関東に染まりつのある自分を、ハツと顧みた友里菜だつた。元々こちらは、母親の実家なのだ。純粹の関西人である芳人とは違う。

それから二人は他愛の無い会話をし続けた。とうとう最後まで、友里菜は先ほど歩から言われた言葉で傷ついたことを、切り出せなかつた。

けれどもケー タイを切つた後、どこか心がほんわかしてくるのはやはり芳人の人柄とか、幼馴染の気安さの所以だらうか？

友里菜はドサリとベッドに仰向けに横たわり、じつと天井を見上げた。

「寮、かあ……芳人にも相談すれば良かつたかな。そや。のりつちに相談してみよう。のりつちはずつと寮生活やし、少し不安だけど、ここは一年生の一人暮らしは禁じてゐるし。それにのりつち、あのカレシと巧く行つてゐのかなあ！」

友里菜は、末松規子が例のＫ大の眼鏡男子と付き合つてゐるのを知つていたので、ちよつと聞きたい事も多々あつたのだ。

「とにかく、もう勉強する気も無くなつたし、寝よかな」

パジャマに着替えながら、友里菜は芳人、大滝、仲本の三人の顔を思い浮かべていた。自分が“王女様”になつたような気がする。それは高校では絶えて味わえなかつた、“蜜の味”だ。

でもやつぱり気が置けないのは、芳人だよね。芳人とだつた

ら、お氣楽なのに。

あ～あ、芳人がこっちに居たらなあ～。てか、来年当たり、こっちの医大とか受けないんやろか？ だつたら、わたしだつてあちこち浮氣しなくて済むのにい。

ごめんね、芳人。別にただのお付き合いだけやから、、、、だか
らいいでしょ。

友里菜は自分が、エゴの塊なのを知っていたし、自分の中に持つ“悪女”的素質にもようやく気が付いていた。

それなのに、どうしてもそれを正当化してしまう自分も、確実に存在する。この矛盾は多分、誰もが持っている物なのかも知れないが。

けれども、実技試験日は段々近付き、さすがの友里菜もそれどころではなくなつた。友里菜は頭を入れ替え、必死になつて練習に励みだしたのだった。

「ねえねえ、お母さん？　わたしさあ～、一学期から寮に入ろうつかな～」と思つてんの。どうかなあ？」「けれどもその反面、母親にひつ連絡する事も忘れなかつた。

「何があつたの？」

「えっ、歩がそう言ったの？」

「ん、まあね。あ、でもそれが理由じゃないのよ」と珍しく友里
菜は弁解した。

「結局わたし……やっぱ窮屈で。お金かかるの知ってるけど、でもいいよね？」

母親は絶句していた。けれどもやがて、

「まあ、お父さんと相談するわ。半年で30万はかかりそうだけど

ね

と渋々言い出したのだった。

「「ゴメンね、我まま言つて」

「教育にお金かかるんは、仕方ないかもやね。何しろ一人っ子だから、もうひとり居ると思えば何とかなるだらうじ」

歯切れが悪いものの、結局友里菜は両親に自分の思い通りのことを押し付けてしまったのだった。そしてその寒、寮に對して少し不安も感じていたのだ。

けれども明日から実技試験。友里菜は雑念を追い払った。

15 初めての実技試験

15 初めての実技試験

明日いよいよ実技試験だというので、歩はトンカツを作っていた。どこか嬉しそうなのは、姉である母親から、友里菜を一学期から寮に入れると連絡があつたせいだ。子供の居ない村越家にどつては、やはり姪と言えども気苦労だつたに違いない。

「そもそも食べて、食べて！ 声を出すんだから、力付けなくちゃ」

「そつは言つても……今から緊張して、余り食欲が出てこない……」

と弱気な友里菜。

「友里ちゃんは、細いからねえへ、ま、姉さんに似てるんだらうけど」

と歩はいそいそとしていた。

食べたくないトンカツをビーフにか胃に押し込んで自室に戻ると、メールが入った。

『夏休みになつたら、何か映画に行きませんか。返事がおくれてすみません』

なんと、もう半ば忘れていた仲本寛之からではないか！ それも試験日前の日に！

けれども冷静に考えると、仲本は友里菜の試験の事など知りはないのだった。大体、夏休み前に実技試験などがあるのは、音楽学部ぐらいだろう。

「ちつ、なんだよお、今更。それに今それビーフじやないんだか

「う

そう舌打ちしつつ、けれども友里菜は返事を打つた。

『お誘いありがとう。けれども私、明日から試験なんです。それに

夏休みは、大阪に戻りますから行けるかどうか』

ところが直後に又メールが来た。

『実はもう前売り券2枚買つたんです。ヴァージン・スーサイズって言うんですけど、興味ないですか？夏休み大阪に戻る前でいいです。日にちは柿沢さんが決めて下さい。遅くなつて済みません』

「『ヴァージン・スーサイズ』？……つて、なんやろ？ ぴあに載つてるかな？ スーサイズつて、suicides=自殺、のことなんか？ 処女の自殺！？ なんや、それ？」

こんな奇妙な映画が好みとは、さすがに美術部だけある、と友里菜は妙に感心した。芳人なら、とても思いつかない映画だ。と言うより、芳人はリアリスト（『現実主義者』）なのだろう。多分、……。ロマンチストに見えて、実はリアリスト、それが芳人の本質なのかも知れない。

友里菜は思わずメールの返事を打つていた。

『大阪に帰る前ならいいかな、と思います』

試験前に不純な事をしていたせいかどうか、夜中に腹が痛くなつた。下痢だ。

「これじゃ何の為にトンカツ食べたんだか……」

と何度もトイレに行きながら、友里菜はブツブツと自分に毒づいていた。

翌日、下痢の話をのりつちにしていると、どこから聞きつけたか横からアンナが口を差し挟んできた。

「下痢つて！？」

「大きな声で言わないでよ」と友里菜は顔をしかめる。

「ハハハ、実はあたしも、した。下痢。腹を下しちやつた。緊張のせいかな？」

如何にも都会風に洗練されたアンナが言うので、友里菜も少しあ

かしくなつて笑つた。幾らか緊張が解けたようだ。

「試験前はね、何を食べても一緒に」とのつづりも書つ。

「ねえ、のりつち。わたしたち、来期から寮に入ろうかなーと思つているんやけど、どうかな?」

「あれ? 友里菜、叔母さんとこじやないの?」

「いや、ちょっとね」と友里菜はもじもじ言い淀む。

「その話は又今度ね。もう直ぐ本番だから。あーあ、段々わたしもお腹が変になつてきたよー」「のりつちも情け無やわやつや。」

下痢をした、などといつぱつちいハナシができるのは、多分ここが女子大だからだろ?。同性のお気楽さというものを、友里菜は初めて肌で感じた。ここには、ある種の“気取り”といつもの無いのだ。男女共学とはそこが違うのだろ?。

例えどんなお嬢様であろうと、やはり女だけといつのはあっけらかんとしている。

やがてABCの順番に名前を呼ばれた生徒達は、広い講堂に入つて行つた。そこは音楽学部だけの講堂でチャペルではないが、やはり緊張する。

「いてててて~、あーあ、やつぱりあかんわ」

友里菜の前は、いつも取り澄ました感じの伊藤有紀だつた。有紀はツンデレだといつもつぱらの噂だつたが、今日の有紀はいつも違つて落ち着きがなくそわそわしている。

「どしたの、柿沢さんつたり?」

「お腹が痛いいい」

「あら? あなたでもお腹壊すの?」

「あなたでもとは何よ」

「いつも落ち着いた雰囲気だもん。でも結構面白いんだ……」

「面白くないつ。緊張してるの」

「それはわたしも一緒に。だから～」

有紀が何かを言い続けようとしたとき、前の生徒が出てきて有紀が呼ばれた。

「じゃお先にい」

「頑張つてね」

「うん、まあね」

有紀はニヤリと笑つてドアの陰に消えた。暫くすると、ドナウディの歌声が流れてきた。細いが綺麗で甲高いリリック・ソプラノだ。次はモーツアルトの「コシ・ファン・トゥツティ」の中のアリア。「上手いなあ」と思わず友里菜が呟くと、隣の生徒が耳打ちした。

「多分、この中でも一番か一番だと思うよ」

友里菜は妙に納得したのだった。有紀との長い友情は、こういう風に始まったのだった。

16 寮へようこそ

実技試験が終わると、いよいよ夏休みの始まりだ。友里菜にひとつは始めての大学の夏休み。本来はウキウキしていいはずだが、二学期から寮に行く為にまずはその寮の探索から始まった。

「寮には気をつけた方がいいよ」と有紀が友里菜に囁いた。

「どうして？ まっさか、幽霊が出るとか、じゃないよね？」

「いやいや、元々女の園なのに、寮はもつともつと女ばかりだから、さつ」

「男は皆無？」

「そうよ、まるでタカラヅカか、女版ジャーネズってとかな」

「そう言えば、キムタクってステキね」

「ぜんぜん分かつてないのね、柿沢さんは…」

「てか、その柿沢さんってのやめない？」

「うん、そうだね。姓で呼ぶのって、仰々しいし。わたしは、有紀だけでいいよ。だけど柿沢さんは……」

「友里菜でいいじゃん。あ、わたしあなたのこと、ゆつきと呼びたいんだけど」

「勝手にすれば？ あなた、ユリナか……うーん、平凡！」と有紀が二タリと笑つた。そういう所は、あの綺麗なコロラトゥーラ・ソプラノの主とは到底思えない、どこか悪戯つ子のような微笑だ。わざとらしいのだが、友里菜にはどこか可愛らしく感じた。友里菜にはない特徴的魅力的、そして悪魔的な笑いだ。友里菜とはタイプの違う人間なのかも知れないが、ただ一つ共通している事は、どちらも一人娘だということ、歌が専攻だということだけ。

終業の日、有紀が思わずぶりな目付きで帰つた後、のつちがや

つて来て、友里菜をいよいよ寮へと案内する事になった。

「女の寮は数棟あるが、広いキャンパスの端に木々に囲まれてひつそりと建つ。のりつちはその中でも最も古そうな寮に入った。

玄関には大きな机があり、古風な電話の前には、一人の女子生徒がチョコンと座つて居る。

「ここの方が来学期から入寮される方ですね？」

「あ、先輩っ！ そうです。大阪から来た柿沢友里菜さん」とのりつちは馬鹿丁寧に答えた。

「ここでは、先輩後輩の関係はつるさーいのよ、分かつた？」
と、のりつちはひそひそと友里菜に耳打ちする。「言葉遣いとか注意するのよ」

「へえ～～～え！」

「そんなに驚かなくていいのよ。別に意地悪とかじゃないんだから、

昔からの風習らしいんだ」

「戦前のお嬢様学校の？」

「や」とのりつちは簡単に言つた。

「柿沢さんと言いましたね、ここに書いて下さー」と先輩が紙を差し出した。

「わたし、三年の芦田美香」と彼女は言つた。「わたし、北海道だからまだ居るの。多分わたしが最後まで居ると思うわ」

「ですよね、芦田先輩は当番ですからね」

「誰もやる人が居ないからやつてているだけじゃないーー？」

「そうきつく言いながらも、美香の目は笑つていた。

「こう見ても、冷暖房完備なのよ、ここは。だって、横浜つて夏は暑いんだもの。そして冬は寒い。ま、その分こっちがお金払つているんだけどや」

友里菜が全欄書き終えると、のりつちはやつと上に上がつて友里菜を案内し始めた。

寮全体がシーンとしており、冷房のせいか湿っぽい。時々、ビニから笑い声や話し声が微かにする程度だ。

「皆ね、帰り支度しているの」とのりつちが囁いた時、向こうから至極健康的な脚を出した、ショートパンツの女子生徒が走ってきた。

「よおっ！」と彼女はボーアイッシュに挨拶する。「新入り？」

その髪の毛の短い、けれども可愛い顔をしたボーアイッシュな女子は立ち止まつた。

「あ、はい」と友里菜は思わず頭を下げた。「来学期から……」

「そうかあ、寮にようこそ、新入りちゃん」

「あ、この方は四年生の良子様」

「良子……ママ！？」

「知らないの？ 四年生は、ママ付けなのよ」

「ママ……付け？」と田を白黒する友里菜を見て、その“良子様”は男っぽく言った。

「なあつ、新入りに変なこと吹き込まないでよ」

「済みませ～ん」とのりつちはぺコリと頭を下げる。

ハハハハハというカラカラした笑いと共に、良子様は去つて行った。

「ステキな人ね……」と友里菜は良子様の背中を見つめて、うつとりと言った。

「ありや、そう？ ま、いいわ。あなたね、合格！ この変人ばかの寮の住人になるのはね。あつといつ間に、溶け込むわよ。うふふふふふ」

のりつちは、クスクスと笑う。

「寮によつこそ、か……」

友里菜はその言葉を噛み締めていた。

17 プリンスはヘタレ

17 プリンスはヘタレ

摩訶不思議なF女の寮に出かけた友里菜は、翌日はA学院大美術部の仲本寛之と原宿で待ち合わせて、映画『バージン・スーサイド』に出かけたのだった。

映画も又理解不能なもので、出てきた二人はしばし黙り込んでいた。少々気まずい雰囲気の一人は、ぼんやりしていたせいか、誰かにドーンとぶつかってしまったのだ。

「ぼんやりしないでよ！」

そう叫んだ女の子は、顔面真っ黒に白いアイライン……俗に言つ“ギャングロ”の女の子である。

「あ！ す、すみません」と寛之は意外にも、怖そうに身を縮めて謝つている。ギャングロの女の子は、「ちゃんと注意してよな」という表情で、寛之を睨みながら去つて行つた。その後姿を情け無さそうに見つめている寛之を見ていると、友里菜は何だか苛々してきた。A学院大美術部のプリンスと呼ばれているほどの美形の容姿を持つてはいる寛之だが、その心は外見ほどではないのかも知れない、と友里菜は思つた。

それでも道行く女の子達が、寛之をチラチラ見ているのが、少し誇らしいような、けれども悔しいようなそんな不可思議な気分なのだ。

「あの映画、どうでした？」と寛之が渋谷方面へと歩きながら言いかけると、友里菜は「フン」という顔をしてみせた。

「さつぱり分かんなかった。何だか、次々と姉妹達が死んでいくのつて……ブキミ～～」

「ですよね」と寛之は相槌を打つた。「あんまし、面白くない映画だつたのかなあ~」

「あ……そんな事無いから……結構美的だつたし」と友里菜は寛之が可哀想になつて、言い繕つた。

「今度は、美術館とかがいいですよね」

「いつ、まだ次のデートのことなんて承諾もして無いのに……案外厚かましい奴なんやわ。

一つ分かつた事は、寛之はプリンスと呼ばれている割には、純朴で素直な性格のようなのだつた。人は、見かけだけで判断してはいけない。

確かに、寛之は美形だつたが、なぜかそれ程心がときめかないのだ。けれども一緒に居て、不愉快な男子ではない……。むしろ得意な気がする。

「うぐう」とまたまた寛之が呻いたので、友里菜は何事かと振り向くと、背の高い若い女が寛之をぐつと睨みつけていた。

背が高いと思ったのは、それは間違いで、実はその若い女は、下駄のようなハイヒールを穿いているのだつた。どうやら寛之は、その女とぶつかりそうになつて、逆にハイヒールで蹴られてしまつたのらしい。

「何か文句ある? あ~ん?」と若い女が憎たらしく言つと、

「あ、ありません」と、又しても寛之はペコペコ謝るのだ。

「悪いのは、そっちでしょ」と、堪らず今度は友里菜が、寛之の代わりに文句を言うと、

「ふん、カノジョか。冴えない女の子~」

そう言い放つて、そのとんでもない高いヒールの女は去つて行く。

「何も謝る事無いじゃん」と友里菜は寛之に腹が立つて言った。

「けど、おつかなくて。てつとり早く、謝るのがいいと……」

「いいつ、本当にヘタレ！ 芳人なら、こんな時、憮然として謝らないと思つけどな。ま、それだけ芳人が無骨と言つことかいな？ それとも……。

「あの」と寛之は、友里菜の妄想を打ち破つた。

「どこがで、飯でも食ひません？ 飯！ 僕、腹が減つたな～～」

「この言ひ方……プリンスの言ひ方とちがつやん！」

「ねえ！ 仲本さんつ」

「はい？」

「このいつとこ、滅多に来ないの？」

「うん、まあ。僕は、葛飾区の方ですか？」

「それつて？」

「うん、下町でさ、実はね、僕はこのいつの所は、本当は苦手で」

「なんだ！」プリンスはプリンスでも、『下町のプリンス』やつたんやわ！ それに仲間からも『葛飾柴又』とか呼ばれてたし。

少しがつかりしたものの、寛之の庶民的なところに、友里菜はどこか引かれた。芳人には無い魅力があるようだ。その上、端正な横顔はズーッと見ても全然飽きない。美術部と言つより、寛之自身が“美術的な彫像”そのものだからだ。

心は騒がなくても、こんな美形は滅多に居ないぞや。一緒にそぞろ歩くだけでも、いいのかも知れない……。みんなにも見せびらかしたいし。

明日は大阪に戻るというのに、友里菜の気持ちは打算的でどこか他所にあつた。そして友里菜は、ついつい次のデートの約束までしてしまったのだった。少々頼りない下町の王子様だが、王子様には、確かに……違ひない……。

18 オレオレ詐欺犯

「いよいよ、友里菜が帰つて来るなあ」

と芳人がうきうきしながら、進学塾の帰り道、駅近辺りで淳平に耳打ちした。その顔は『テレ』している。友里菜がヘタレのイケメンプリンスとデートしているなど、想像もしていない。

「へえ、いつ?」

「あさつて、とかやつたなあ」

「じゃあ、京都駅に迎えに行くとか?」

「まつさか! そんなことはしいへんからな。それにその日は、全

国共通テストの日やん?」

「そつかー」

「それにな、友里菜はそんなことを喜ばへんオンナなんやわ

「……あああ、もう聞き飽きたわ、それ」と淳平はぶーたれた。

「で、お前ら、『デキテんの?』

「その言い方、品ないなあ」と芳人は顔をしかめたものの、直ぐに首を横に振つた。

「いいや、あかんねん。ま、いいとこまでは行つたけど、友里菜つてガード堅いねん

「そつかー」

「お前はそつかーしか言えへんのかい!」

そう言つと、芳人は淳平の頭を小突いた。けれども、ふとケベイ真つ赤な車に目を留めた芳人は目をパチパチしている。そり車は駅前にサーッと止まり、中から出てきた若い男が女性を車から引っ張り出していた。その女性はどこから見ても、風俗っぽく、その若い男も洒落た服を着てはいるが、どこかそぐわない。まるで服を着て

いるのではなく、『服に着られている』といった顔だ。

「あつ、あいつう！」

「へ？ 芳人、あんなん知つてるの？」

「う、うん」と芳人は言つと、その若い男の猿顔をじつと見つめていた。

「じゃ、俺ちよつとこの辺で。駅前の本屋に寄るさかい」

「ああ、じゃあな、明日」

そう言つと、淳平は素直に離れて行く。その素直さが芳人にはありがたかった。

淳平が駅に吸い込まれると、芳人はそろそろと、女性と別れたその若い男に近寄つた。

「よつ」

若い男は、不自然なほどギクリと振り向く。そしてそのちつこい目が、芳人を捕らえた。

「あ

「樋口だろ？ 久し振りやな」

「あ……ああ……芳人、かあ」と樋口は、両手をポケットに入れると、上等な服に完全に負けた顔をしかめた。その髪すら、今では突つ立つたイケイケ髪だ。

「ああ、久し振り。なあ樋口い、随分羽振り良さそうやないか」「まあね」と樋口は虚勢を張つたようにつぶやいた。

「何か用か？」

「まあ用は無いけど、昔の友達やんか、樋口」

「相変わらず、芳人は自信家やな。今何してんの？」

「受験生、つーっかな、予備校生」

「んな格好してると思つた」と樋口はツンツンイケイケヘアを、手でいじつた。

「あ、俺行くわ」

「その車、借りてんのか？」

「まさか！ 俺のや」と樋口は怒ったよつに言つた。「悪いんか？」

「お前、自分で稼いだん？」

「そや！ どこが悪いねん。俺一人で稼いだんやで！ オカソントー人暮らしやけどな、もう誰にも馬鹿にされへんわ！ 世の中、金やな、金やわ」

昔の、苛められ泣いていた樋口とは違つていた。今はその瞳はどこか不遜で屈強で、世の中で精一杯抗つてているように見える。けれども芳人は、高校中退の樋口がなぜこんなピカピカの外車に乗れるか、不可解に感じた。

あり得へん！ まさかな……？

「芳人、見とき！ 金があつたら、みんなへいこらや。以前は見向きもしなかつたネエちゃんやその他の奴ら、今では俺の前でペコペコしどる」

「確かに成功するのは悪いこいつぢやないけどな」

「じゃあ、俺行くわ」

そう捨て台詞を吐くと、樋口はその車に飛び乗り、振り向きもせず、あつという間に芳人の前から姿を消した。

「あいつ……変わったなあ。そやけど、変やな。どこか変や」

芳人は小首をひねつた。今の今は、友里菜や友里菜の事など全く脳裏からは消し飛んでいたのだ。

「ま、いいか。俺、樋口のこと、やつかんでいるんやろか！？」

樋口がオレオレ詐欺で捕まつたことを知つたのは、友里菜が大阪に戻つて来た次の日だった。

友里菜に連絡しようとケータイを持つた時、母親が広げている新聞に目が行つたのだ。社会面だった。

「ちょ、ちょつと貸して！」

「なんや、どしたん？ せつかちやなあ、相変わらず」と母親は小言を言つたが、芳人は構わず顔を新聞に突っ込んだ。

そこにあつた記事。

『オレオレ詐欺グループ、逮捕』

主犯は他の名前だったが、その中に樋口の名前が小さく載つていた。

やつぱり……そ、うか。あいつ……犯罪者になつてもうたんかあ

芳人には、中学時代のまだヤンチャだったが、無垢な樋口のサル顔が、ふと浮かんだのだった。

19 せつかぐの夏休みが…

19 せつかぐの夏休みが…

もやもやした思いを抱きつつも、やはり芳人はれつきとした男子。片方では、友里菜に再会するのを待ち望んでいたのだつた。

そして明日は、塾の合間を縫つてやつと友里菜に会えると言う日、どうしても鼻の下が長くなり、数学の“鬼の”高橋先生の言う事が耳に入らない。

「ちょ……大久保っ。鬼がお前を睨んどるでえ」と横の淳平が耳打ちしたが、遅かつた。

「おいつ、その大久保！ ちつとも聞いとらへんやないかあ！」と案の定高橋先生のドラ声が響き、他の生徒は自分でも無いのに身を引く。芳人だけがキヨトンとして、目をパチパチさせた。

「え！？ 僕？ 僕ですか～？」

「そや。何をへらへらしとんねん！ ふん、大方可愛い子とセックスでもしていいる妄想してたんとちやうかいな」

みんながクスクスと忍び笑いをしている中、芳人は真っ赤になつて言い繕つた。

「ま、まさか）。ちょっと別のこと考えてて」

「ま、いいさ。若い男子は当たり前やな。けどな、この代数、解いてみい？ 解けへんかったら、居残りやでえ」

「ええつ、そんなアホな！」

鬼の高橋は、黒板にスラスラと積分の式を書いた。

「ほら、これや。これ解けたら、勘弁してやる」

「ええ～～～つ！」

芳人は素つ頓狂な声を上げた。みんなの視線が自分に向けられて

いる。

慌てて机から飛び出したせいか、前の生徒の机の角に当たった芳人は、「いててっ」と言いつつ、前に出た。「どう? 出来るなんか、その低脳頭には?」

芳人はむつとして高橋先生を睨み返す。一発触発の危機を感じたのか、クラス中が固まっていた。

けれども芳人は白いチョークを手にすると、カタカタという小気味良い音を響かせて、チョークを走らせた。

「むむつ。あいつ、出来るやんか」と淳平が思つ間もなく、書き終えた芳人はチョークを置いた。

「解きました」

数秒の時が流れた。

「うん、見事やな」と言つ高橋先生の声がしたと思うと、先生はパチパチと手を叩いた。

「してやつたりやな、あいつ」と淳平は唸つていた。

「ようやつたやん、お前」と机に戻つた芳人に、淳平が感じ入つたように囁くと、芳人は一ツと嗤つたのだった。

「実はな……昨日の晩、その式だけ解いてたんや、偶然」淳平は呆れたように口を開けた……。

「……て感じやつたんや、昨日」と芳人が久し振りに会つた友里菜にそのことを言うと、友里菜は「あ、そう」とだけ、拍子抜けしたように答えたのだった。

友里菜は化粧していた。少し前まで、素ツピンに近い友里菜しか見ていなかつた芳人は、たつた数ヶ月の間に蛹から蝶に変化した友里菜の姿に、じきまきしていたのだ。

以前は素ツピンでも綺麗だなーとは思つていたが、ほんのリルージュを引き、細いアイラインにブルーのアイシャドウの友里菜は、もう昔の友里菜ではないみたいに感じる。

「何じろじろ見てんのよお、芳人は」と友里菜は、相変わらず変化無しの芳人に向って拗ねたように言った。ドキドキ感はなぜか無いが、やはり落ち着くのだ。

「いいや、別に。ほら、久し振りやから、なんや～奇妙な感じで」「何が?」

「友里菜……オナになつたな～とか」

「何よ、その言い方!?」と友里菜は噴出しそうになつた。友里菜自身は、自分の変化に気付いて居ないのだ。

「色っぽい……」

「本当?」と友里菜は上目遣いに問いかけた。その眼差しに、芳人はぐらつとくる。

「てか……映画何にする?」と梅田を歩きながら、友里菜は言った。

「『バージン・スーサイド』だつたら嫌やから」

「へえ、何で? 見たの?」

「え? ああ、ええつと、友達と向こうで見ちゃつたし……何か分かり難い映画やつたし」

友里菜の脳裏に、チラツと寛之の顔が浮かんだ。正反対の外見だ。

「友達、出来たんか?」

「うん、出来たよ、沢山」

「そんな感じやなあ～。青春してるつて感じが漂つて……いいよな、友里菜は」

「来年になつたら、芳人も大学生になるんやし、それでいいじゃん

「いいじゃん”か。もう関東弁になつたんかあ」

「映画じゃなく、どこかに行こうよ、芳人。プールとか、山とか

「思いつきりそうしたいけどなあ～無理やわ。今日も早く帰らんと

「夕方は塾?」

「うん」

「そつかー」と友里菜は不貞腐れて言う。芳人がまだ予備校生なの

は分かつては居るつもりだつたが、けれども実際の所、どこか壁が二人の間に存在している……そんな気がしてきたのだった。

「「めんな、友里菜。本当は……もつと友里菜と一緒に居たいんやけど」

「いいよ、仕方ないもん」

芳人はふと、友里菜が誰かと付き合っているのではないかと邪推し始めた。それが妄想のように膨らんで、一緒に居てもどこか不安で楽しめない。

せつかくの夏休みなのにな……。やつぱり俺……宙ぶらりんやな。

塾に行く電車の中で、芳人は沈んでいた。

20 美しい人

20 美しい人

芳人は凹んでいた。友里菜と別れた後、余りの友里菜の素つ氣無さについて次のデートの約束を言いそびれてしまい、なぜか自信をなくして家路についたのだった。

自室に戻ると、電気も点けずにベッドにゴロリと横になり、侘しい自分の身を嘆いていた。どこがどうというわけではない……。友里菜に愛想をつかわしたのでもない。相変わらず、友里菜のことが好きだ。抱きつきたいほど、好きだ……。

だのに、一人の間に横たわる、厳然とした立場の違いが恨めしい。向こうは、青春真っ盛りの“女子大生”！ そしてこっちは、医者志望と言えばかっこいいが、所詮浪人の落ちこぼれだ。来春、医学部に通るかどうかも分からぬ。

いかん、いかん。なんでこんなに弱気になんねん。ただ久しぶりに会った友里菜が、以前と違つてたからつて。オンナが変わる、と思ったんは当たり前やんか。むしろ、洗練してたし、いい意味で大人になつてもうたやん……。それに俺を待つてくれるやん……多分。

夕食は帰りに笑笑で食べたし、なんか暑いからクーラーでも付け、気を取り直して勉強しようつと思つた時に、ケータイが鳴つた。

「もしや！ 友里菜！？」

けれどもそれは、従姉の美里だった。

「もしもし、あつ、美里ちゃん？」

「そや。だれだと思つたん？」

「いや、別にい」

「へえ、今日の芳ちゃん、妙に神妙やなあ。なんかあつたんか？」
「別に何にもないよ」と芳人は強がつた。

「ならええけどな～。あのなあ、ちょっとビリカ行かへん？ 芳ちゃんが空いてる日でいいねんけどさあ」

その誘い声の艶っぽさに、芳人はしばし今のガックリ状態を忘れた。

「ううん……そやなあ……」

「ま、浪人生では無理か」

「いや！ ちょっと待つて」

言いつつ、芳人は手帳をめくつっていた。

「そや！ 明日の午後は空いてるんやつた。夕方遅くから、塾やけど。それでもいい？」

「いいよ、分かった。わたしなあ、なんか暇やねん。それにここに居辛くてさ」

「親の家やろ？」

「うん、けどさあ……失業中やし、なんか居辛いねん。ちょっと出かけたかつたし。そや！ ええイタリアンの店知ってるから、そこ行こか。その前に、買い物に付いて来て」

「うん、ええよ」

それから一人は、時間を指定してケータイを切つた。

切つたものの、芳人は不思議な感覚に陥つていた。いくら従姉と言つても、そんなにしげく会つていいのだろうか、という奇妙な思い……。

「ま、ええやん。俺もちょっと腐つてたしな。それに美里ちゃん……綺麗やからなあ」

少しだけ鼻の下が長くなるのは仕方ない。やはり美里は大人の女子だからだ。

翌日の昼頃、芳人と美里は梅田で待ち合わせると、午後遅い昼食

に美里に導かれるままに、小洒落たイタリア料理店に入った。

「最近は、梅田も変わったもんなあ～」と美里は、梅田近くの高層ビル群の一角にあるレストランの机に、物憂げに肘を付きながらつぶやいた。横顔に少し疲れたような、気だるげな憂いが漂い、美しい。芳人は思わずうつとりと見とれていた。

けれどもその腕は、真夏だというのに白くて細い。そしてその手首にはジヤラジヤラした不釣合いな腕輪が幾重にも巻いてあるのだ。それは、美里には相応しくなかつた。美しい横顔に反比例して、どこかしら下卑た気がした。

「何見てんねん？」ヒメーユーを見つめながら、美里は芳人に詰問した。

「あ」と芳人は我に返る。「俺もヒメーユー見んとな。けどな、美里ちゃん」

「なんやの？」

「その腕輪、変やわ。美里ちゃんには合つてへんなあ」

「なにい！？」

美里の顔が変わつた。綺麗な分、怒ると夜叉のようになるのだ。「あ、ごめん。せつかぐ」馳走になるつて言つのに。「ごめん、ほんま、」「ごめん」

ふふんと美里は鼻で嗤つた。

「芳ちゃんつて、ほんま素直やな～。そんなとこが可愛いわ」

そう言つと、美里はさつとその腕輪を取り払つた。

「見てみ？」と腕を突き出す。「見たらええねん」

「へ？」と芳人は、美里の豹変ぶりに怖気づきつつ、恐る恐るその細い手首を見た。その手首には、明らかに傷跡が……。

「これつて！」

「そや。リストカット」と美里は素つ氣無く言つ。「分かつた？」

芳ちゃん

「う、うん」としか芳人は言えない。美里の秘密の一端を知った気後れで、言葉が出ない。

「そんなに驚かんでも、、、、ええやん」

「でも、美里ちゃん。何で?」

「色々あつたんやわ……」と美里は、窓ガラスの向こうの通りを見ながら小声で言った。

「色々、か」

「そう。現実は厳しいんやで、芳ちゃんつてば」

美里は再び振り向くと、ニッと妖しく微笑んだ。

「や、何食べるか選ぼうかあ」

21 誘われたものの

21 誘われたものの

ランチをたらふく食べた後の「こと、一人は外に出た。少なくとも芳人はたらふく食つたが、けれども美里は余り手をつけていない様だつたが、芳人はさほど考えずに居た。多分美里はダイエットしているはずだと、勝手に思つていたからだ。

「美味しかつたで～」と芳人は本氣でそう言つたが、美里はフンと鼻を鳴らしただけだ。

「ほんまあ？ 嘘でも嬉しいわ。……といふで芳ちゃん、カノジョとはまだあ？」

「何がまだだよお？」

「決まつてるじゃん」と美里はその細い肘で突く。「セックス」「ぎょ」と芳人は思わず立ち止まつた。「そ、そんなにあからさまに言わんでもいいやんか」

「こんなことは、思わせぶりの方が、なんやエロいやん。だからあつさり聞いたの。まだかつて。そやなあ～、芳ちゃんのその態度見てたら、まだまだつて感じがしたわ。違う？」

図星なので芳人は返つてうろたえる。

「ま、まあな……そんな感じかな。ま、いいといつたんやけど」

「ふん、あんたみたいなおぼこいのは、無理かもなあ。図体だけはでかいのに、肝つ玉はまるで蚊や。蚊あみたいやから

その笑いには、嘲笑があるよつて毒々しく響き、芳人は自分の従姉ながら少し憎らしくなつた。

「そやけど、友里菜は、ああ、あのカノジョの名は友里菜つていうんやけど、友里菜はまだその気が無いらしくてな～、そんな無

理強いなんて、僕には出来へんわ」

「関東の女子大に行つたお嬢様やさかい？」

「お嬢様つて家柄じゃないけどな。ま、清楚つて感じはするわな」

「芳ちゃんつて、そういうのに萌えるんだーー！」と美里は面白そうにはやし立てた。

「じゃあ、芳ちゃん……まだ童貞？」

そう言いながら、美里はそつと自分の腕を芳人の腕に絡ませた。

「ど・う・て・い」と芳人は目をパチクリんとしている。

「そつかー、その調子じやあ、やつぱ童貞やつたんやわあ」

美里はそう言いつつ、益々その体を押し付けてくる。

「あ、あの……美里ちゃん？……ちょっとお……つづーかな……」
と芳人はしどろもどろだ。

そして気付いたのだった。ここは梅田の裏手。ホテルの看板が目立つ場所だと言う事を。

「なあ……わたし、教えてあげてもいいのんよ」

「はあー？」

「だから……セックス！」

「んがあーーー」と芳人は絶句した。

「けど……僕達、従姉弟同士やねんで！」

「従姉弟やなかつたらいいって言うの？」

「いや、そやないけど、、、でもお」

「見てみ。この通りの人達つて、わたし達のこと恋人同士にしか見てへんつて！」

芳人の頭にカツと血が上った。けれども、芳人は激情に身を任せ
るほど、美里に対しての恋情がないのを知っていた。

芳人はそつと腕を解く。

「なあ美里ちゃん。こんなこと、あかんわ」

美里は意外そうな表情で、頭一つ大きい芳人の顔を見上げた。そ

の唇は微かに震えている。

「なんで」と美里は小声で言つた。「なんでやのん? なんであかんの?」

芳人は俯き、しぶりへ言葉を失つていたが、ややあつてやつと答えた。

「僕達……別に恋人じゃないし」

「怖いんやね」

「違うよ」

「芳ちやつんて、妙に辛氣臭いとこあるし、そんな堅苦しいから女の子に相手にされへんのや! 今時セツクスして何が悪いのよ! 愛情がなくつたって、やつてる人は仰山あるやんか!」

美里の言葉一つ一つが毒を含んで、芳人を打ちのめした。

「美里ちゃん……今日の美里ちゃん、おかしいよ……以前の美里ちゃんやないやん」

こう芳人が咳くと、美里の顔がみるみる内に歪み、そして道路の真ん中で突然片手を顔を覆つて嗚咽し始めた。芳人は狼狽し、どうしていいか分からぬまま突つ立つてはいる。道行く人々が、興味津々にジロジロと一人を見ていたが、やおら一人のオバチヤンがつかつと芳人に近寄つてがなりたてた。

「あんたなあ! 好きな人を泣かしてはあかんやん! ええ色男が何してんねん! ! !」

「この人、僕の従姉、なん、つす、けど」と芳人。

「なんでもええけどな~、別嬪さんを泣かすは、ろくなことないでえ」

要らないお世話だと芳人はイラついた。けれども、傍から見ればそう見えてもしょうがない。そうでなくとも、他人にお節介をやく土地柄だ。

「なあ、美里ちゃん。みんな見てるさかい、どつかサテンにでも寄

ろか」

と慌てて芳人は美里の手を引つ張ると、キヨロキヨロ辺りを見回した。少し離れた路地に小さなヒュ（*上島珈琲株式会社）の看板を見つけると、中に入った。そして一番奥のテーブルに座つたが、美里はまだ下を向いたままで時々すすり上げている。

「美里ちゃん……なんかあつたんちやう？」

「東京ちやう！ 川崎や！」

「ま、似たようなもんや」

「似てへん！」

そう叫ぶと、美里はやつと顔を上げた。

「失恋？」

暫くの無言のあと、美里は聞こえるか聞こえないかの小声で答えたのだった。

「捨てられたんや……」

芳人は目をパチパチさせながら、成熟した美里の奥を覗くよつじつと対峙していた。

22 やつて来た下町のプリンスに大慌て

22 やつて来た下町のプリンスに大慌て

芳人との短いデートのあと、友里菜はどこか釈然としなかつた。以前はあんなに会いたいと思っていたのに、いざ会つてみると「これでいいのん?」と思つてしまふ自分が居る。相変わらず芳人は逞しく、又オーラがあるので気持ちが離れたわけではないのに……なぜこんな空しい気持ちに陥るのだろう?

「ま、いいか。どつちも別に誰か他の人と浮氣しているわけじゃなし……ただわたし達つて案外幼いってことやんか。それに、ここに居るのもそんなに長くないし、何だか家に帰つても退屈するばかりだなあ」

そんな頃、心の隙間を埋めるかのよつた、とんでも出来事が起つた。

朝だというのに突如ケータイが鳴り出し、友里菜は寝ぼけ眼でケータイを開けた。もちろん、誰から来たつてことも確かめずに。「ふあい、もしもおしつ」と気の無い生返事をしていると、「もしもしつつ、柿沢さんつ?」と若い男の声がする。それは芳人ではなく……どこかで聞いた声。

「あれつ、もしかして仲本君?」「え……あ、そうつす」

友里菜はガバッと飛び起きた。

「どしたの?」「いやあ～～～

「はつきり言つてよ」

「つまり……今、僕京都に居てて」

「キョウウト……? つてことは」

「そう。Jリーグに来てるんです」

「はあ～」と友里菜は溜息をつく。「で？」

「実は」と仲本はなおも躊躇いがちに言い続け、友里菜は苛々してきた。

「何よ？」

「会えないかな～」と思って。せつかくここまで来たんだし。あ、来たのは僕一人じゃなく、実はグループで来たんですけどお～あとの二人、これから鞍馬に行くとかつて。でも僕はさあ～、暑いの苦手だし。

あの……ダメですか……？」

相変わらずヘタレだ、と友里菜は思った。けれども、どうにも憎めないヘタレ振りなのだ。きりっとした整った顔とは不釣合いなほどの、ヘタレプリンス……。

「そうかあ、どうしようかなあ。わたし、今起きたとこだから」「僕、待ちます！」と仲本は間髪入れずに答えた。「何時間でも！」「今ね、京都のホテルに居るんです。ロビーで待つてますから……外は猛暑だからなあ～」

「じゃあ

友里菜は京都のホテルの名前を聞きだすと、ケータイを閉じ、大あぐびをした。「んじゃ、暇だから行くかな～」

友里菜が朝御飯もそこそこに出かける支度をしていると、母親が怪訝な顔でジロリと友里菜を見つめながら聞いてきた。

「友里ちゃん、どつか行くの？」

「うん。東京から来た友達が、京都に居るんだって。なんか、案内して欲しいみたい」

「大学の？」

「他大学だけだ」

「それって……男の子？」

「別にどっちでもいいやん」

「変な人じゃないのね！？」

「やだあ、わたしもう大学生だよ。余計な心配しないでよ」
言いつつ、友里菜は念入りに化粧を施し、口紅を丁寧に塗った。
塗りつつ、友里菜はこんなことしていいのかな、とチラッと思った。
けれども、仲本とは映画に行つただけで、特別なことはしていない
し、好みいとは思ったものの愛しているといった生々しい感情は
無いのだ。

ただ、退屈しのぎなだけ。だからいいよね。芳人は今はただ勉
強勉強なんだしつきと塾に缶詰なんだから。

友里菜は急いで着替えると、「じゃあ行つてくるー！」と一声か
けて、出かけて行った。

23 従姉のコイバナ

23 従姉のコイバナ

UCCの看板のある何の変哲も無い喫茶店で、芳人と美里は黙りじくつたまま座り込んでいた。

けれども、先に口を出したのは腕を組んで窓から外を見ていた芳人だった。

「けど美里ちゃん……なんでやねん？ そこまで思いつめるって「相手にな……妻子が居てん」とやつとの思いで美里は口を開く。

「それって！ 不倫かあ」

「でつかい声出さんといてよつ！」と美里はふくれつ面で遮った。

「ああ……『ごめん。けど、不倫には違いないやん』

と芳人は身体を美里に寄せながら囁いた。

「ん、まあ、不倫と言えば不倫やけど。でもわたしは本気やつてんから

「相手は、パイロットとか」と芳人は面白半分に言った。けれども美里はその大きな瞳をパチパチさせると、「そりや」と答えた。

「へ！？ ほんまのパイロット？」

「嘘のパイロットなんか居てへんやんか。ま、でもな副操縦士やつたけど」

「ふうん、ようやるなあ、美里ちゃんつて」

芳人はまじまじと従姉を見つめた。そう言えば、美里は友里菜と違つて、既に熟れたオンナの匂いがする。

「続いてたのは2年ほど。でも奥さんにバレた。それからは修羅場やつたわ～。ちょうど会社も傾いてきたし、彼は自分から別の航空会社に行つてもうた。黙つてやで！ けどわたし突き止めて、会社の前で待つてた。航空会社つて、それ外国の会社やつたけど。

玄関でもめて、騒ぎになってしまった……彼、わたしのこと、罵倒したんやわ。雌豚つて！」

「メスブタ！？」

「わたし、なんかむしゃくしゃして食べまくつてたの。過食症いうんかな……確かに10キロちかく太つていたけど」

「でも、今の美里ちゃん、スマートやで」

「今はな、拒食症や」

「なんや忙しいな。交互に拒食やとか過食やとか……」

「それが病気やもん。しゃあないやん」

美里は又黙り込んだ。芳人は美里が話しうままで、じっと待つていた。

「愛するつてのは、しんどいこつちやわ。その内にな、わたしなんか仕事中に失敗が多くなつて、そして太つたつて言われて……クビになつちゃつた！まあ会社の業績、悪くなつてたしな。

でもな、わたしフライアテンダントの仕事、好きやつてん。ほんまに好きやつた。夢やつたんやから。だから、頭が真つ白になつてしまつて……暫くはマンショնに閉じ籠つて、リスクやつてた。このまんま死のうかなと思つたこともあるんや。けど心配して来てくれた母に見つかって、無理やり連れ戻されちゃつたあ～」

美里はふいに笑い出した。

「な！わたしってアホやろ？底なしの馬鹿やろ？へぼい恋愛小説のへぼいヒロインみたいやろ！ わやろ？ そうつて言つてよお！ ねえ芳ちゃんつてばあ、そうだつて言つてよお！」

その笑い声がいつの間にか、歪んでいた。泣き笑いのような頬を、涙が伝い落ちている。芳人は痛ましいと思った。それだけしか思い至らない。恋愛の経験と言つても、まだまだ初心な芳人にはその言葉しか思い浮かべないので。

ウェートレスが奇妙な目付きで、こつちをジロジロ見ていた。

「な、美里ちゃん。みんな」つむぎ見てるよ」

「見ててもいいやん！」と美里は叫んだ。『みんな』とビビリでもええ』

「美里ちゃん……まだ若いんやし、先があるやんか。そんな力込みたいな男と別れて、僕は正解やつたと思つけどな」

美里はアイスコーヒーのコップのストローを意味もなくかき混ぜながら、上目遣いに芳人を見上げた。

「芳ちゃんも随分大人になつたな。そりやそつやわな。わたしな、何か芳ちゃんに聞いてもらつてスーツとしたわ」

「ちょっとはマシ？」

「うん、ちょっとはね」と美里は悪戯っぽく笑うと、ハンカチで涙を拭いた。

「あほな従姉でごめん。芳ちゃんもな、今の彼女を裏切つたらあかんよ、絶対に」

芳人は言葉もなく頷いたが、どこか心が落ち着かない気分だった。

「オソナとオトコつて厄介やな。僕達は遠距離やから……なんか不安があるんや、実はやけど」

「何が不安？」

「友里菜が……他の男子とこちやつこじるんとひやうかな」とかさ」それを聞いた美里はブツと噴出した。

「そつかー。芳ちゃんもただの人間やな、煩惱の多い男子に過ぎないんで、わたしちょと安心した」

「変な誉め方やんか！？」

「じめんな、こんな話してしもつて。けどほんまに恩に着るから」「これからどうすんの？」

「やうやなあ。スッキーはもつ懲りたから……今職探ししているとこ」

「今度は良い男とらぶらぶしなよ」

「はい、分かりました」

と美里は、幾分晴れ晴れとしてそう言ったのだった。

24 灼熱の京都巡り

仲本寛之に言われた京都のホテルのロビーに辿り着いた友里菜は、寛之をすぐに発見した。寛之は、所在無げにロビー奥の白いソファに座っていたのだが、その横顔はやはりどう見てもイケメンそのもの。

時折、ロビーをそぞろ歩く客の何人か（それはもちろん女性だが）は視線をちらちらと注いでいるというのに、寛之自身は全く気付いていないようだ。両手を合わせたり開いたりと落ち着かない様子で、ただ一人座っていた。その空間だけ、なぜか涼しく感じてしまい、思わず友里菜は二タリとしてしまう。

「仲本君っ！」

呼びかけられて、寛之はハツとして顔をあげ、それからホツとした表情を見せて立ち上がった。

「あ、あ、どうもどうも」

「急いで立ち上がらなくていいのよ。わたしだって暑いんだもん。何か飲みたいし」

近寄っていくと、寛之は益々混乱した素振りになつた。

「「めんじめん、本当に」「めん。急に電話して急に呼び出して、柿

沢さんには本当に悪いことしてしまったよね」

「いいのよ、どうせヒマだつたし。あ、それに次のデートの約束もしてたでしょ？ でもそれって、後期に入つてからじやなかつた？」

「あ、どうも……とか、こここの飲み物高く無いですか？ ジュースに800円だなんて……僕んちでは考えられない高値だなあ」

「あら？ でも、こんな高級ホテルじゃそれぐらい当たり前よ。分

かつてないの？」

「あ、はい、済みません。なにせ、京都は修学旅行以来で
「A学院生なのに、京都もちゃんととは知らないの？」

「はい、なにしろA学院に行くまで、原宿や青山通りも歩いたこと
なかつたし……というか、一年二年は、キャンパスは元々東京じゃないし」

「あ……そつなんだ」

友里菜は、A学院生は全て金持ちばかりだと思いこんでいたのだが、当てが外れたようだ。むしろ、芳人の家の方がずっと金がある気がする。

けれども、友里菜はその800円のジュースを飲みながら、自分が卑しくなったような気がした。昔は、相手が貧しかろうと金持ちだろうとどうでも良かつたというのに、今の女子大に入学してから、なぜか気持ちがスノップになってきている気がする。別に、女子大で出会ったクラスメート達が皆金持ちと言つわけでは無いのに、それはなぜだろうか？

友里菜は少し血口嫌悪に陥った。

「どしたんですか？ なんか、黙つて。ああ、そうか！ 僕の厚かましさにちょっと呆れてるんですね~ 分かる分かる」

全然分かつて無いのに！ けど、ほんと、憎めない人！

「さあてつと、それじゃどうかに行く？ 東山の方から清水寺？
それとも哲学の道？」

「ええつ！？ この糞暑いのに、京都を散策するんですかあと寛之は情けない声を上げた。

「ばてちやいますよ」

「てか、あなたね、まだ若いんでしょ。せつかく来たのに、京都の

蒸し暑さを知らずに帰るなんて、許さない！」

「ううん、困ったなあ」と寛之は真から困っているようだ。けれども、やっと決心したのか、寛之はおもむろに立ち上がった。そしてさつとそのレシートを取り上げて言った。

「これは僕に払わさせて下せー」

「あれ？」

友里菜は思わずとじろいで、寛之の洗練されたとじろを発見。これが芳人なら、「な、友里菜、割り勘やで」と言つとじろだらうか？

「でもや」

「いいえ、僕が無理やり呼んだんですから」

「無理やりじやないんだけじ」

だけど、東男のメンツはたてなくちゃーね。
あずまあとこ

けれども一人がホテルの巨大なガラス扉を開けると、そこは灼熱の古都だった。

「うへへ～」と初っ端から寛之は後悔したようだ。けれども、言った以上寛之は作り笑いをしながら、「じゃ行きますかね」と雄々しく友里菜に告げた。

暑さに強い友里菜は、あちこち寛之を連れまわす。最初の頃、寛之は我慢して付いて来たものの、ほどなくして一時間もしない内にへろへろになつて、近くのお寺のベンチにへたり込んだ。

「いじで一休みしましょつよ」

「いじわよ」と友里菜は一ソマリすると、その横に座つた。寛之はハンカチで額の汗を拭いている。その何気ない、へたれた仕草だが、けれどもどこか色っぽい。何をしても、何もできなくとも、プリンスはプリンス。絵になるのだ。

「一度、仲本君を描きたいな～」

「ええつ、まじっすか？」

「そうよ、まじで」

「この灼熱地獄を味わった甲斐があつたよな」とプリンスは本音を告げたのだった。

25 夏休みの終わり

寛之が関東に戻つて行つたあと、友里菜は一時的に虚脱状態になつた。

大阪での友人と会つたり映画に行つたりだべつたりしたもの、一向に気が晴れない。心は早や横浜にある自分に、我ながらびっくりしていた。もともと母親の故郷で在るとは言え、今まで自分の居るべき場所は関西だと信じて疑わなかつたのに、今では自分のアイデンティティーは、半ば関西、半ば関東となつてゐる。

友里菜は暇な時間は、本庄アンナや、博多に戻つたのりつちと、延々と長電話していた。のりつちも、それから会津出身の長渕響子も、みんな大学に戻りたいらしいのかおかしかつた。

のりつちはだべる。

「あたしさ、博多つて九州一の都会だから、大都会に住んでるとか思つてたの。それがさあ、帰つてみたら何だかちっぽけに見えるんだわ。不思議だね、ここに居る時は博多弁なのに、あつちでは標準語やし。そうやつて、土地土地で変わっていくんやね、言葉つて。ここでは、天神つてファッショソのメッカなのに、何だかそんなに感じない。視野が広まつたというか、それとも擦れてきちゃつたのかな？」

「わたしは、のりつちのようだ大阪が田舎だとは思わないよ。だって、京都つてやっぱりあつちには無いじやん。鎌倉鎌倉つたつて、京都に比べればどうつてことない狭い場所だしさ。

だけどわたしも、何だかあつちへ早く戻りたいつて氣はあるの。もともと、母があつち出身だからや、だからかな……」と友里菜も続けた。

「わたしは、会津が今でも好きだし、東京が全てとは思わんよ。だけど、やつぱ会津つて田舎だなーと思つた。今度戻つたら、109で服を買い捲るわ」と響子まで言つのだ。

そうこいつしている内にお盆も過ぎ、友里菜はいよいよ横浜に戻る時期が近付き、ウキウキしていた。大学は、お盆の間には寮すら開いていないのだが、寮が開きだすお盆過ぎになると、ぼちぼち学生がキャンバスに戻つて来るのだ。

「わたしさあ、8月末にはあつちに戻るわ」

と友里菜は、あれこれ箱詰めしながら母親に言つと、母親はなんとなく氣だるく答える。

「あ、そつ。よつほど、あつちが氣に入つたのね。昔は、国鉄、いやJRで箱をウンウン言いながら運んだものだけど、今は宅配とかあつて便利よね~」

「はー、大昔のこと言わないでよ」

「昔は、パソコンもケータイも無かつたし。第一、教授がパソコンで欠席とかを連絡するつて、そんなこと考えも出来なかつた」

「もうお、お母さんつて、懐古趣味過ぎだよ。時代に付いて行けないんじやない? もう老けないでよつ、早すぎるわ」

「そうね」

そう答える母親は、心なし淋しげでそして、確かに老けていた。

友里菜は戻る直前に、芳人に会つた。その日は、ほぼ朝から一日中芳人と過ごした。そんな日はここ最近は珍しいのだが。

二人は、やつぱり京都に出かけた。相変わらず、残暑厳しい灼熱の京都だ。けれども、暑さは関東も変わらない。最近、日本全国どこへ行つても夏は酷暑だと思う。

下賀茂は京都の北だ。暑いし観光客もさほど居ない。友里菜は芳人の手を握つたり、そして暑いにもかかわらず、芳人と腕組みしたりした。芳人の手は暖かく、そしてどこか素朴でやはり正直な自分

を表す安心感がある。少し前に一緒に出かけた、寛之とはやつぱり違つ。このゆつたりした、まつたりした感覚は何なのだろう？

「友里菜あ、どうしたん？ なんや、今日は静かやなあ、おとなしそ過ぎて気味悪いやん」

「あれ、そうお？」

友里菜は芳人の腕にぶら下がったように歩きながら、そう言つた。

「わたしは、以前と同じよ」

「違うな」と芳人は断定した。オンナの変化を感じ取るほど、芳人も又大人になつていていたからだ。

「昔と違つて、綺麗になつたし」

「あら？ ジヤあ、以前は綺麗じやなかつたつて？」

「違うよ、まあ昔から可愛かつたけどな」

と芳人は大慌てで反論する。「けどな……なんちゅうかいな……その……色気つちゅーもんがもつと出て来たと言つのかな。そして僕は、やっぱ見る目があるな」と確信したわ」

「一年は長いわあ」と友里菜がポツンと言つた。「もう待ちくたびれてる」

「なんやー、まだまだ先があるのに」

ふとそう言つた芳人は、友里菜が急に遠い所に行つてしまつ様な気がした。

「友里菜」

「なに？」

「僕、絶対に医大に受かるからな！ 待つててや。浮氣したらあかんで」

芳人はそう言つなり、友里菜をぎゅっと抱き締めた。向こうから違うカツプルがやつて来ていたが、幸いなことにそのカツプルは友里菜達のことなど一切目が入らないように、自分達だけの世界に入り浸つていた。

「浮氣なんて、してへん」

そう言つた友里菜の胸は、ちくりと痛む。

「信じなきや、芳人つてば」

「けどなあ、やつぱりどこか弱気になるんやわ」

と芳人は友里菜を離しながら、そう呟いた。けれどもその言葉とは裏腹に、友里菜のふくらした唇を激しく奪う。友里菜も黙つたまま、そうしていた。暑さなど、もう何も感じない。胸に秘めた情熱ほどの熱さは、今はこの世に存在しないのだった。

「芳人」と友里菜はあえぐ。「好きよ、芳人。待つてるから」

その時の友里菜は本気だつた。少なくとも、その一瞬だけは。向こうの方にホテルが見える。けれども、芳人はあえて誘わなかつた。

「じゃな、身体に氣いつけ」

駅での別れ際、芳人はそう言つとニッコリ微笑み、電車に乗つた友里菜をいつまでも見送つていた。

夏の終わりは、青春の終わりに似て、どこか虚しい。

26 再会したクラスメート達

26 再会したクラスメート達

9月、あちこちに散っていたクラスメート達が、F女子大のキャンパスに戻つて來た。

友里菜は久し振りに、F女子のど真ん中にあるチャペルを見ると、なぜか胸が高鳴つた。そこから離れて、今度入部する寮が木立の中に少し見える。

「こんななんだつたけ。なんだか、こんなに綺麗だとは思わなかつたのに……今改めてみると、綺麗やな～」

友里菜が9月最初の日に、音楽館の前で一瞬立ち止まつて感慨にふけつていると、

「柿沢さん！」と呼びかける声がした。それは夏休み中に長電話していたのりつちや響子とは違つた声で……。

「え？」

「おはよ！　久し振りだね」と、ハキハキした声の持ち主、少し鼻持ちなら無いつて感じの伊藤有紀だつた。

「あら……伊藤さん」

「又わたし達、隣同士だよね～、エとKだもん。一学期からの合唱でも、わたし達つて同じソプラノだしさ」

これは宿命かも、と友里菜は思った。けれども、そんなに嬉しくない。

それでも二人は、一緒に中に入った。

「夏休み、どうだった？」と有紀が聞くので、友里菜は「まあまあ」と答える。

「伊藤さんは？」

「わたしも、まあまあ」

そう答えると、有紀はニッと笑った。

「ちょっと変わったね、柿沢さんつて

「そうお？ 伊藤さんも、少し変貌したよ

「どんな感じに？」

「うーん」と友里菜は腕組みして、有紀を見つめた。ここに入学して初めて、有紀をじつと見つめたような気がする。自分より少し背が低く、やや猪首だがバストが大きく瞳も口もでかい。そして、毛細血管が見えるかのような淡い肌色で、天然パーマのかぐるりとした茶色の髪の毛。そう言えば、瞳の虹彩も薄茶色。俗に言つて、お茶目”な女子”といつただろうか？

「可愛くなつた……つて思つ」

「へへへへ」と有紀は笑つた。「あなたもよ、柿沢さん」

生意氣そうな顔が、笑うとクシャクシャになるのだ。自分にはない魅力、自分には無いチャームポイントを備えているのだ……伊藤有紀は。

「柿沢さんつて、スタイルいい。男子にもそう言われるでしょ」と言つ言い方も、もう嫌味には聞こえない。

「ああ、男子、ね。うん、そうかな」

「わたし、一人つ子なの。実はさ、兄が一人居たんだけど、わたしが小さい頃に亡くなつちゃつて」

「え！？ ほんと？」と、始めての話に、友里菜は驚いて身を乗り出した。

「わたしは、正真正銘の一人つ子だけど」

「残つたのは、わたしだけだって、親は言つけど……仕方ないじゃんねえ」

この話は、聞きようによつては悲劇なのだが、なぜか有紀が喋るトサラリとして嫌味が無いのはなぜだろう。

「あーら、お一人さんつ」といかけたのは、本庄アンナだ。背が

高く、都会的でいつも洗練されているお嬢様が、手にフルートの入った箱を提げていた。

「やつと、始まつたか。わたし、夏中退屈してたよ。ヨーロッパ巡りしてたんだけどさ」

の言葉に、友里菜と有紀は互いに顔を見合せた。

「わたしの両親は、ただのサラリーマンだから。それは無理だけど」と友里菜が言つと、

「わたしのところもそう」と有紀が続けた。「アンナちゃんはいいよね~、親が社長さんだもん」

「そういう言い方は、この『女では無しよ』とアンナは笑いながらスルリとかわした。

「三人揃つて何言つてんのぉ」と言つ甲高い声は、末松規子こと“のりつち”だ。のりつちは、綺麗な女子なのだが、少し騒々しい所がありそれが益々つてきていた。ガーリーな衣装が、更に磨きがかかったガーリーさだ。

「さ、行こ行こ」とのりつちが促した。「なんだか、ドキドキするね。変なの!~?」

「のりつちって、ここに帰つてきたのが余程嬉しいみたいだよね~」と友里菜が茶化すと、「あつたり前よ!~」とのりつちは元気よく答えた。

四人はガヤガヤ言いながら、自分達の溜り場の教室に入った。既に半数の先輩達やクラスメート達が集まっている。皆、始業式のチャペルでの礼拝を待つてているのだ。

「わたし、この冬洗礼するの」と、隣に座つた有紀が友里菜にそつと囁いた。

「え!~? 洗礼……つて?」

「驚かないでよ。だつてこい、ミッションじやないの。柿沢さんは、そういうのに興味ないの?~」

意外だった。全然そういう風に見えない有紀が、実は信仰を持つていたとは。そして、兄達を失っていたとは……。人は見かけに寄らない、といういい例だ。

「わたしは」と言いかけて、友里菜はふと口をつぐんだ。今まで考えたことすらなかつた。教会なんて……信仰とか、洗礼とかも。確かにここはミッション系女子大だというのに。ただ、彼氏と遊んで、楽しく勉強して、良い音楽家になることしか。せいぜい、ステキな映画を見て、スタイル良くなりたいとか……。

なぜか、自分が浅はかに感じるのだ。

「家は浄土宗だけど、わたしは仏教は知らないし」

ふふふと有紀は笑つた。けれどもそれは、軽蔑の笑いではない。「さ、行こうよ、みんな！」と促すのりつちの声が響く。「又始まりだあ

けれども友里菜は、生まれて初めて、真剣にチャップレンの声に耳を傾けていた。

信仰って……何だろ？ 神様って？

ふと見ると、有紀が両手を組んで一心に祈つていた。友里菜は初めて、何だか有紀を尊敬したのだった。

27 いよいよ寮へ

27 いよいよ寮へ

叔母村越歩の家から、ミニのトラックが出発した。いよいよ、大寮に入るのだ。

ピアノはそのままだつた。寮にはピアノ室が無い。練習室は、同じキャンパスに在る音楽室でやるのが慣わしだ。夜遅くまでやる為、一人一人の練習時間は細かく区分されていた。それを、音楽部の寮生一人一人が持ち、皿を皿のようにしてその練習室に入る。練習室には、番号が付いていて、約20室余りの一畳ほどの個室だ。

練習室は一応防音になつてはいたが、近寄ると騒々しいことこの上ない。果たしてそんな所で練習が出来るのか、友里菜は不安だつた。けれども、叔母の家で気を使い汲々としているよりは、確かにまだましかも知れない……。叔母の家から遠ざかるにつれて、心が晴れ晴れしてきたのは確かだ。見慣れた景色がどんどん過ぎ去つていく。新しい一ページ……ロマンチックに言えばそんな感じだ。

けれども、いよいよ寮が近くなつてくると、奇妙な不安にも襲われる。今まで集団生活は友里菜はしたことがない。一人っ子の友里菜は、常に一人で居ることに慣れきつており、大勢の人達と一緒に寝起きしたのは、修学旅行ぐらいだ。

いいんだ。気にしない、気にしない。どんな女子達が居たとしても、今まで何とかやつてきたし。だから今度だつて……。

けれども、脳裏には「イジメ」「シカト」といった言葉が駆け巡る。その反面、友里菜はこの女子大を信じていたところがあつた。まだ前期だけだが、このF女は独特の伝統と気風があり、どこかお

つとりしていることにも気付いていたのだ。

だからと言つて、何事も無いと思つほど、友里菜も馬鹿ではないが。

寮の玄関には、のりつちが待つていた。というより、待ち構えていたと表現した方が良いかのように、目をキラキラと光らせて待機している。むしろ、その瞳はランランとしていたのかも知れない。そしてこの間玄関口にチヨコンと座っていた、例の三年生の芦田美香が、やはり同じ机に座つていた。そしてもう一人、体格のいい中年のオバサンが……。

「やー、来たかあ、友里菜あ！」とのりつちが飛び出ると、そのオバサンはジロリと、けれども上品にこちらを伺つた。友里菜を值踏みしているような、変な目付きで。

「友里菜あ……あちらは、寮長の長谷川先生よ。先生つて言つても、何も教えて無いんだけどさ、一応寮長だから、ご挨拶してね」

「寮長！？」と友里菜は絶句した。確かに、寮には寮長が居るが、そこまであからさまに居るとは思わなかつたのだ。せいぜい、それはテレビドラマの中にしか存在しないと思つていたが、どうやらそうではなかつたらしい。

友里菜は、業者が荷物を下ろしている間、慌てて長谷川寮長の所に行くと、ペコリとお辞儀をした。

「新しく入る、一年の柿沢友里菜です。どうか宜しくお願ひ致します」

「新入寮生です、先生」と、芦田美香が事務的に言い換えた。「一年の音楽部生でござります」

「ああ、そうなの？ お待ちしていましたよ」

と長谷川寮長の言葉は馬鹿丁寧だが、どこか余り好きになれない感じの人物のようだ。

「ここに寮のマナーや仕組みなど、よおくお教えしてね。それじゃ

わたくしは、この辺で」

寮長は、至極丁寧にお辞儀を返すと、静々と廊下を歩み去つて行く。けれども突如振り返ると、

「あ……柿沢さんと仰つたわね。ここは男子禁制ですから。お兄さんといえども、お父様といえども、この中には入れないことにありますよ」と言つと、今度こそ離れて行つた。

「な～んか、やつぱりどこか浮世離れしてゐるわ……この世界」

「なによお、弱氣だね～友里菜つたら。直ぐに慣れるよ」

とのりつちはポンと友里菜の肩を叩いた。

一人は思い荷物を抱えて、長い廊下を歩き出した。

「それはそうと、友里菜は北寮の一階の205号室。実はさ、本當は部屋は一人で使うんだけどお、友里菜は途中からだから、三人になつちやつたの」

「一部屋、三人!？」と友里菜は再び絶句。「聞いてないよお」

「だけどさ、仕方ないのよ。ここは一人部屋は無いの。ま、三人つてのも珍しいんだけど」

「巧く行くかなあ」

「大丈夫よ!」ここはさ、わたしでも、イジメの話とか聞いたこと無いもの。今時、そんな場所滅多に無いわよ。ただし……」

「先輩後輩の礼はちゃんと、でしょ」

「その通り。それさえ守つてれば、何も起らなによ」

とのりつちは一タリと囁つた。

28 ルームメイト一人

早速案内された北寮205号室には、二人の寮生が既に待機していた。慌しく明日の始業式の支度をしている最中で、格好は極めてラフ……というより、極めて普段着のいい加減な感じで、まず友里菜はそれに驚いた。

「こちらが、社会学部四年生の木川田樹理“様”、そしてこちらが一年生の英文科新居都子さん。樹理様は、金沢。そして新井さんは……確か、関西？」

「そうです、京都」と、目鼻立ちのはつきりした美人とも言える大柄な都子が、のりつちに告げた。樹理様は、側でひつそりと目立たずして立っている。

「音楽学部ですってね」。音楽学部の人達は、毎晩練習室に閉じ籠つて、大変そう！」

とだけ樹理様は述べた。物静かだが、どこか得体が知れない風情だ。「それじゃあたしはこの辺で。じゃ友里菜、ガンバ！」

のりつちは片手を振つて二コリと笑うと、さつさと出て行つた。この205号室は、思ったより狭い。とてもお嬢様学校の寮とは言えない狭さだし、両壁にある一段ベッドも如何にも古臭い。いや、レトロとでも言おつか……。その一つの一段目は開いてはいるが、もう一つには何やら「こちやん」とした物が置かれてあつた。どうやら、物置といった有様らしい。よく見ると、漫画、本、DVD、それからよく分からぬ物が山になつてゐる。

「宜しくお願ひ致します」と友里菜はとりあえず、ペコリと頭を下げた。ジーンズにどう見てもよれた感じのTシャツ姿の一人は、顔

を見合わせて少し笑つた。

「堅苦しい事は抜き、抜き」と都子が言つて、友里菜から荷物を取り上げ、ポーンと開いた一段ベッドに放り込む。

「さー、そこが新寮生の寝るところだ。」

「はあ」と友里菜は、ショックを隠しながら言つ。正直言つて、友里菜は一段ベッドになど寝たことが無いのだ。一人つ子だから仕方ないとは言え……先行きが思いやられる。

「部屋替えがあるから、今度はあなたも一段目に寝れるわよ」と、慰めているつもりなのか、樹理様が静かに言つた。

「わたしは、樹理様と呼ばれているけど、"様"には特別な意味はないのよ。ま、伝統とでも言つかな。それから、こつちはみやちやんと呼んでるの。あなたは、コリナさんだよね。いい呼び方、ないかな? ね、みやちゃん?」

「コリナって、百合の花のこと?」と都子が聞く。

「いえ……友達の友に……」

「ゆりちゃんなんて、平々凡々」と都子が友里菜の言葉を無視して言つた。「りりちゃんなんて、どうかな、ね、樹理様?」

その甘えたような言い方が、妙に新鮮だ。少し嫌味っぽいが。「りりちゃんも、ちょっと変だわよ」と樹理様がのたまう。「ゆりでいいんじゃない?」

「リリーがいい!」と都子が快活に叫んだ。「ね、そうしましちう」「あの」と友里菜が口を差し挟んだ。

「なに?」と二人。

「どうしても、、、、あの……呼び名がいいでは要るんでしょう?」

「まあ、大体ね」と言つて辛そうに都子が答えた。

「あなたは柿沢さんね。カッキーはどうかしら?」

と樹理様がお上品に言つと、すかさず「さすが!」と都子が相槌を

打つ。

「それいいわ。それにしましょ。ね、カツキーつていいよね～」「カツキー～？」と友里菜は田を白黒させた。「カツキー……ですかあ」

友里菜が躊躇つているうちに、いつの間にか友里菜は“カツキー”という呼び方になつてしまつていた！

それを翌日、始業式で有紀に話すと、有紀は噴出した。

「カツキーかあ！ すごいあだ名！ でもいいかも。じゃあ、わたしもそう呼ばせて頂くわよ」

「ま、仕方ないかな～、それじゃあ、有紀は“ゆつき”でいいよね？」

「で、それから？」と有紀は畳み掛ける。

「夕食には、賛美歌歌うの。それから、アーメンと言つてから食べる」

「ふうん」

「朝食は、パンと牛乳だけだった。それから各自、掃除当番があつてさ」

「はー。聞いていると、何だか修道院つて感じだね」

「そ、修道院よ。まさに、修道院！」

そう言つてから、友里菜はくすりと笑つた。

「異世界だわ」

「でも、寮生はみんなそれに慣れているのよね」

「うん。でも唯一つだけ慣れない事が」

「なに？」

「夜になるとね……真つ暗なの。漆黒の闇よ！ みんな、勉強していくテレビとか無いし……休憩室にはあるんだけど、夫々の部屋には置いてないの。浮世離れしてるよね」

「もう根を上げたか」と有紀が言つと、友里菜は向きになつて言つ

た。

「根を上げたりしてないよ。せいぜい楽しむ。だけどね～、叔母の時にも自由はなかつたけど、今回も違つた意味で自由が無いと語つたわ、わたし」

それは真実だった。けれども、不思議と嫌な感じはしない。ルームメートの一人は、奇妙に優しかつたし、規則正しい生活も又いいものだと、友里菜は感じ始めていたのだ。

ただし、各自ケータイをするときだけ、みんなどこかしら角や廊下に出て行つてひそひそ話し込んでいたのだけが、肌に合わないといえば合わない。プライバシーが極端に無い生活では、彼氏にかけるのも楽ではなかつた。

よつて、友里菜もその日はとつとつ両親にも芳人にも、ケータイを掛けられなかつた。

29 やけっぱち

29 やけっぱち

「畜生！ ちっくしょうーー！」

道々芳人の罵り声が通りに響き渡り、帰り道を急ぐサラリーマンや〇し達が不審そうに眺めるのも知らず、芳人は尚も言い続けいた。

「おいつ、芳人、もうやめろや」となだめる淳平の言葉も聞かず、芳人は暗い顔をしたまま、ぶつぶつ悪態を付いていた。それは、不甲斐ない成績を取った自分自身にでもあり、更にはそんな自分をあしまにクラスみんなの前で罵倒した高橋先生への憎しみもあるのだ。

それともう一つ、今朝病院から戻つて来た母親の言葉も芳人を少なからず動搖させていた。

「なあ、芳人」と母親はいつもと変わらない声で、塾に行く芳人に向つて言つたのだった。

「え？ なに？」

「あんなん、ちと話があるんやけど……」

「なんや、早う言つて。もう時間がないんやさかい」

「わたしなあ……どうやら転移してもうたらしく……」

「転移……！？ つて、つまりガンが？」

「うん」と母親は何気に答えた。芳人は物凄い衝撃を受けたが、けれども顔色を変えないように努力しながら言つたのだ。

「けど……今すぐどうとかいうんやないんやろ？ すぐ死ぬとかじや」

言つてしまつて「しまつた」と思つたが、もう遅い。けれども、

母親はいつものように、冷静にお茶を飲んでいた。

「まあ、ちやうとは思うけど、もう一度精密検査やね、多分」

そう答える母親の背中が、急に老けた様に感じて、芳人は「なら、よかつた」と心中もない言葉を発すると、逃げるよつに家から出て行つた。

それなのに、よりもよつて数学の最低点を取つてしまい、クラスのビリケツになつてしまつとは！ こんな有様では、国立どころか私立の医大も危ない……といつうか、かなり無理っぽいではないか。「なあ芳人、芳人は数学は悪いけど、あとの一科目は上の方やんか。それにもう秋だし……つて、こんな事言つても慰めにはならんやろうな～」

と淳平は芳人の代わりに溜息をついた。そういう淳平だって、余り良い成績とは言えないのだが、それでもどこかの私立医大には通れそうなのだ。

「お前んとこは、金が唸つていていいよな」と芳人は言いたく無いことまで親友に言つてしまつた。

「唸つてるわけじゃないよ」と淳平も不機嫌になる。「てか、今日のお前、少しおかしいよ」

淳平は、勘だけは鋭い。

「カノジョを待たすのが嫌なん？」

「それだけやないつて！」と芳人はがなつた。と言つたか、悲痛に叫んだ。

「それだけじゃない？」

「つまりな……あの……おかんが転移したつて、そう言つていた……」

…

「転移かあ」と淳平は鶲鶲返しに言つた。「つて、どこの部位に？」

「知らん」

「知らんつて、そんなことぐらうちやんと聞けよ。部位によつては、

大したこと無いときもあるし、反対にやばい時もあるから

そういう淳平は、如何にも医者の息子だ。

「そうやな……俺って、なんか焦つてたわ。気持ちが落ち着かんでな。医者になるつもりの人間が、すぐに動搖するなんて」

「分かるわ」と淳平は同意する。そして優しく言い添えた。「他人じやなく身内がなるとそうなるもんやで、そう父も言つてた。理性的にはなれへんつて。どんな名医でも」

芳人は「そやな」と呟きながら、小柄な淳平の肩を叩いた。良い友達を得て良かつたと、今改めてそう感じる。

「やけになつたらあかん。自分の負けや。そう言つのも、僕のおかんとはちやうからかも知れないけどな」

「俺、勉強する。猛烈に勉強する。それまでは、友里菜には会わん」「欲しがりません、勝つまでは、かいな」と淳平は微かに笑つた。

「今はただ、お前のおかんを支えることしかないやんか」

「そやな……淳、おおきにやで」

そう言いつつも、芳人は来年の入試が失敗に終わるのではないかと、恐れていた。二人の女性に……一人は愛する友里菜、もうひとりは尊敬する母に対して、申し訳が立たないと妙に律儀に感じていたのだった。

「それにしても、母は強し、やな。平氣な素振りで」

「きっと、心の中では泣いてるし不安で一杯やと思うよ。けど、母親つてのは、息子には弱みを見せへんものとちやう?」

自分よりも、淳平の方が大人だ、と芳人がそう確信した瞬間だつた。

30 秋の調べ

明治の有名な建築家が建てたというキャンパスも、既に銀杏並木が黄色や朱に変わり、古びた風情の趣きある図書館の窓から、ハラハラ落ちる落ち葉が見える秋。

「何、ボーッとしてんのよ」と有紀が友里菜に声を掛けた。前期試験が全て終わつたその日、友里菜は脱力感なのか、食堂の窓辺に陣取つたのはいいものの、ぼんやりと外を見ていたのだ。

「あ、ゆつきか……」と友里菜は目が覚めたように、有紀を見上げた。この頃一人は大体いつも一緒に違つクラスで授業があつたり、試験が別々であつたりしても、結局は食堂の同じ席で共にランチを食べるのだった。

それから、お決まりのお喋りが続き、有紀が帰宅する直前まで、いつも一緒に。それがずっと続いて行くことを、今の二人は知りうはずが無いが……。

一見高慢ちきに見えた有紀は、実はナイーブな神経の持ち主であり、頼りがいのある生徒だつた。人は見かけで判断してはいけない、と言つ典型だ。

その上、有紀と友里菜は共に一人っ子。一人っ子しか分からぬ微妙な心の襞を持つていることは、お互に何も言わなくて分かる。見た目はかなり違う一人だが、絆だけは深くなつていく一方だつた。そういうわけだから、友里菜は時々男子がうざいなーと感じることが多くなつた。女子だけの気楽さは、多分“タカラヅカ”もそうなのかも、とふと思つ。

「秋だからメランノリーになつたつてか?」

「まさか！ だけど、少しはそうかな～。でも違うの。ねえねえ」と、友里菜は昨晩、Ｋ大生の大滝洋平からお茶の誘いのメールがつた事を告げた。

「で、どした？」

「うん、約束しちつた」

「カツキーはもてるからな～」と有紀は正直に言う。「大坂に居る医大を目指している幼馴染でしょ、それから、美形の美術部の男子、そして今度はＫ大生。みんな、女子の憧れのような人ばかりじゃない。

「でも、氣をつけてね。一兎を追うものは、いや、三兎を追うものか？ ま、どっちでもいいけど、結局皆に逃げられたりしてね。ふふふ

「かもしれないなあ、あたしつて全然悪女でも何でもないのにさ、なのに、何だか断りきれないの、みんな」

「ファム・ファタールって言うのよね、それ」と有紀は物知り顔で言った。

「わたしはファム・ファタールなんかじゃないわよつ

「うん、一見清純そう。でもその裏に潜む悪女の素質、きっと友里菜は持っているんだわ」

有紀は悪戯っぽく言った。

「で、どこに行くの？」

「多分、宛て無し」

「いいよいよ、どこでも行きなよ～、いいないな～。わたしは日曜日は教会だもん」

「教会か～」と友里菜は両手で顎を支えながら、上田遣いに有紀を見上げた。

「一度は行きなよ、カツキー。ま、オジサンとオバサンと老人達しか居ないけど。時には、若い奴も居るけど……でも、あんまり魅力はない奴らばかり」

そう話す有紀は、ふと聖女に見えたりする。

「女子大のチャプレンの話で充分、と言いたいけど、でもいつかは行こひつかな」

と友里菜は本気で答えた。けれども、実行するのはまた別の話だ。一体、いつになるやら……。

ふと友里菜は、誰かが弾いたショパンの曲を口ずさんでいた。「あ、それ！ ノクターン！」と有紀が当てる。「ノクターンにも色々あるけど……わたし、それ好きだな。余り有名じゃないけど、秋にピッタリで」

「うん、侘しい感じだものね。今度弾きたいな」

二人は確実に音大生になつていた。

「じゃあ、明日のデート、ガンバ！」

「何を頑張るのよお！？」

「うつふふふふ」とだけ有紀は笑つただけだった。

なぜかそれ程ウキウキもせずに、寮に戻ると、ルームメイトの樹理様が変な素振りをしている。もしかして……お払いの格好？

「あ、お帰りい。明日の夜、暇？」

「あ、はい。いいえ！」

「どつちなのよ、一体」

「いいえ、です」

「そつか、それは残念だね～」「

「え？」

「あたしさ、明日秋祭りの巫女のバイトするの。ほら。この近くの

神社で。へぼい神社だけど、もしかしたら来てくれるかな～とかつて」

「神社のバイト！？ 巫女！？」と友里菜は我を忘れて叫んだ。

「なんかおかしい？」

「いえ……別に、つてかおかしいですよ！ だって、ショパンショ

ンだし」

「関係ないの」と樹理様は、あつけらかんと言ひ。「バイトだもん。それに一度、あの巫女の衣装着たかつたし」

「でも、神社もよくミッションの女子大生を雇うんですね」

「日本つてそんな国なのよ、あはははは」

やはり、日本は一神教にはなれないかも知れない、と友里菜は思う。そしてクリスチヤンの有紀と、多神教の巫女姿の樹理様を想像して、思わず苦笑していたのだった。

31 ストーカー君？

31 ストーカー君？

K大生の大滝洋平とは久し振りに会つた。如何にも育ちの良さそうな男子で、それ程のイケメンではないし、その上小柄で友里菜と歩いているとどっちが背が高いか分からぬほどだ。

友里菜は結構気を使って、その日はローヒールの靴を穿いた。そしてちらつと、洋平がひょっとして、シークレットブーツでも穿いて来たんぢやないか、と足元を見た。けれども、洋平は普通のスニーカーで、特別背丈を気にしている風でもない。

……と見たのは、実は友里菜の浅はかさだったのだが。

「やあ、久し振り！」と先に来ていた洋平が手を挙げた。どうにも気障なメガネをかけ、服装もお洒落だ。品もいい。けれども、ときめかない……。

「僕のこと、もう忘れたのかと心配していた。だつて、君つて結構可愛いからね～。他の男子が放つておくはずが無い、と思ってさ」「い、いいえ、まあ……。でも、ほんと、お久しぶりです」と友里菜は言葉を濁す。

「ごめんね……理系つて結構忙しくてさ。でも……僕だけぢやないよね、デートしてんのは？」

「はあ？」と友里菜はキヨトンだ。この洋平のトーンには、どこか付いていきにくい。見た目、爽やかな男子なのに、どこかが……変？

「ええ、まあ、そうかな。一応、今はまだフリーつてことだ」

「なの？ 実は、関西に待ち人が居るんぢやない？」

と洋平は一瞬疑りぶかそうな目つきになつた。けれども直後、洋平は朗らかに、

「じゃ、行こうか」と言ったのだった。

けれども、K大学というのは、やはり魅力だ。姫路出身と言うが、恐らく素封家のお坊ちゃんか、大切に育てられた良家の息子さんだらう。K大学に行くというのが、そもそも関西人なのに関西の大学に行かないという、というより行かせないという親の気持ちがあるし、多分お金も有るに違いない、と友里菜は皮算用していた。自分が、一瞬、卑しいタヌキになつたように気がしたが……。

とにかく、デートは一応は楽しかつた。若者の行きそうな所に連れて行き、小洒落たイタリアンレストランに連れて行く、というのは合格点だ。

けれども、友里菜が食事の後にトイレから戻つて来ると、洋平がさあ～つと何かを差し出すではないか！ 紙切れ、それは……？

「あれ、何？ これって」

「あ……詩です、詩」

「し？」

「散文詩、ですよ」

「ああ、詩ね」

「あなたのことを書いたんです。読んでくれます？」

「わたしのこと？ へえ」

と友里菜は何気なくその紙切れを取ると、読んだ。そして……どん引いた。

「あれえ～、わたしって、文学の才能ないんかな？ この中味、よく分からんだけど」

「そうですかあ？ 芸術家なら分かると思つたんだけどな」と残念そうな洋平がその紙切れを取ろうとしたので、友里菜は慌てて言った。

「いいのよ、わたしそれ頂く。芸術家、じゃないけど」

「そうですか！」と洋平のうわずつた声。「じゃそれ、取つていて下さい」

「え、ええ」

友里菜は無理やりほほ笑むと、そのキモイ詩の書かれた紙切れをバッグに入れた。

結局何事もなく洋平とは別れたが、どこかしつくりこないままだ。寮に戻つてその紙切れをルームメイトのみやちゃんに見せると、みやちゃんこと都子はケタケタと笑いこけた。

「あああ、腹が痛いつ。今頃こいつの書く人が居るなんてね」「何笑つてんのよ」と言いつつ、部屋に入つて来た樹理様は、いつになく神妙な顔でその詩を読んでいたが、友里菜にそれを付き返した。

「捨てた方がいいかも」

「え？ この詩を？」

「違うわよ、この男を」

「大滝君を……」と友里菜は呆然。

「樹理様～、何でなんですか？ この人、変態とかつて？」

「違うわよ。けどさ、言つておくけど、こいつストーカーとかになりやすいタイプだと思うわ、あたし」

「で、なんででしょ？？」と友里菜が聞くと、樹理様はニヤリと嗤つた。

「神のお告げよ、神の」と厳かに告げた。

「はは？ バイトのやり過ぎじや……」と都子も呆気に取られる。

「あんた達、まだまだ甘いわね～」と樹理様。

「ま、いいから、お土産あげる」

「ええつ、お土産つすか？ 何ですかあ」と一人は色めきたつたが、目の前に差し出されたのは……。

「林檎飴、ですかあ」と、毒々しい色の林檎飴を都子はそれでも恭

しく持つた。実は友里菜は生まれて初めて食べるのだが。

「美味いっ！」と友里菜は叫ぶ。

「何でこんなのが美味しいの？」と都子。

「今日男子と食べたイタリアンより、美味いッ！！」

「まじかよ」と都子は呆れ、樹理様は「満悦」になった。

こうしてバカバカしいが、洋平とのデートの日は終わった。けれども、それは果てしない“終わりの始まり”でしか無かつたのだが……。先輩の言葉はよく聞くべきだったのだ。

32 初めてのクリスマス

32 初めてのクリスマス

毎日、洋平からメールが来るようになつて、友里菜は憂鬱になり出した。最初は律儀にレスしていたが、その内に大したことでも無いことまでメールが来て、レスするのも面倒臭くなる。その内に、憂鬱から少し気色悪くなつてきた。

その中に、芳人からのメールがあると、友里菜はやはりほっとしてしまう。年月というものは、そう簡単には裏切らない信頼を築くのだ。

文面とは違い、芳人は悩んでいた。志望校を変えることが、である。

相変わらず数学のテストは散々で、遂に芳人は余り好きではない兄貴の雅人にまで頭を下げて、数学を教えてもらうことにした。

三つ違いの兄雅人は、既に大学四年生。来年からは大学院に進むことが決まっていた。悔しいが、やはり雅人は秀才である。数学や英語など、まるで幼稚園児に教えるかの如く、一から丁寧に指導した。

けれども、他人よりも始末に悪いのが、親や兄弟の間柄だ。雅人は容赦なく、怒鳴り散らし、叱り飛ばし、芳人の神経をズタズタに傷つけ、そして蔑んだ。そんな過酷な時間を乗り切り事が出来たのは、やはり入院している母親のことと友里菜からの変わらぬメール、そして淳平の熱き友情だった……かも知れない??

「ちつ、兄貴の激励だか、残酷だか分からん叱咤にも耐えられるんは、やつぱお袋のことがあるからかもなあ」。毎回見舞いに行く度

に、廊下を通る医師達や看護師達を見ていると、自分もその仲間に入りたい、いや、絶対に入るんや、と思うもんな。

でも医者つて、入るのもしんどそうやし、なるのも大変。で、なつてもうても、またまたしんどい職業みたいや。どうするよ、芳人？ やつぱり、挑戦してみるか、一度田の？ で、又落つこちたらどうするん？

あれこれ思案しながら、いつものアーケード商店街を歩いていると、どこから流れ来る静かなクリスマス・ソング ふと、友里菜の面影を追う自分が居た。

「今頃、友里菜、どうしてるかなあ？ 来年の春、胸を張つて『俺、受かったぞおおお！』つて、言えるんかな……。あ～あ、なんか心細くなってきたやんか」と、とぼとぼ歩く芳人だった。

一方、友里菜の方は絶好調で青春謡歌だった。

相変わらず、洋平からのメールはしつこい程だったが、それ以外は何事もなく過ぎて行つた。

先輩達は、一人一人、学内ソロリサイタルを開き、そのコンサートの観客の出席人数によって、人気と実力が分かる、と言われている伝統的なイベントだったが、けれどもそれは、一方では『卒業論文』に当たるのだった。だから、四年生はこの時期、遊びどころではなく必死で練習し、完成した者から順番に学内コンサートを催すのだ。

友里菜と有紀も又、一緒に先輩達のコンサートを聞きに行つていた。

ある時は、観客が溢れんばかりの時もあり、ある時は閑散としている時もある。どちらが圧倒的に下手だと上手とかではなく、それは運や成績以外の事でもあることを、二人ともまだ理解していな

かつた。

とにかく一年生の今はただ、冷やかしに行くだけだったのだ。

「ねえ友里菜……うちの教会、一度クリスマスに出席しない？ 今年（1999年）は、クリスマスが生憎土曜日なんで、日曜日の19日がクリスマスとなってるの。だから、カツキーもまだ大坂には戻っていないんでしょう？」

「え……多分ね」と友里菜は曖昧に答えたが、心の隅では、一度は教会に行くべきなのかな、と考えていたこともあつたのだ。

他人には誰にも言わなかつたが、この頃友里菜は真剣に、“死”というものを考えていた。それは、親しかつた祖父を亡くしたこともあるだろうが、芳人の母親の病気が再発したということもあつた。芳人からのメールで、他人の母親なのにどこか愕然としたのだ。なにはともあれ、身近な人達の死や病と言つうものは、友里菜を少しは大人にする。そして親友有紀の誘い。

「クリスマスはお祭りじゃないというけど、でもお祭りなの、やっぱり」

と有紀は意外なことを言つた。「偉大な人が誕生した日ですもの。でも、その日に生まれたわけじゃないんだけどね」

「キリストは飼い葉桶の中で……って、チャブレンが言つてたよね」

「ふふふ、実際に飼い葉桶の中で生まれたかどうかさえ分からないんだよ、友里菜つて結構信じてるんだ」

「じゃ、東方の三博士が来たってこととか、羊飼いが拝みに来たとかも？」

「それは伝承よ」と、呆氣なく有紀はのたまつた。

「第一、マルコとヨハネの福音書には、クリスマスの事なんか載つてないもの。それに、記述すらないし。でも、わたし達って、その伝承の中でもいいから、救い主の誕生を願つて、そうした綺麗な物

語の中に浸りたいんだと思つ

「至極、当然」と友里菜は相槌を打つた。

「よし！ 今回は行つて見ようかな。次の日に戻るつもり

「そりか～、嬉しいな」

「昔、芳人とルミナリエに行つたけど、それでもいいのかしら？」

「お祭りはお祭り、堅いこと言わなくていいのつ。だからカッキーつて、真面目すぎるつて言うんだよ」

「なんだあ、真面目で悪かったね」と友里菜は言つたが、けれども幸福感に包まれていた。ただし、その日しつこい洋平からの誘いがあるとは露知らずにいたのだが。

33 思いがけなく…

33 思いがけなく…

何度もかの見舞いに病院に行くと、手術後も順調な母の様子が今日は少し変だた。窓からは、寒空がのぞき、もうすぐ冬の気配がする。

「あら、もう来たの？ 早いね、勉強は順調に進んでるのん？ 雅人のことだから、あんたを凄く叱つてるんでしょうね」と、見ていたように言うが、その通りなのだから仕方ない。

「うん、まあな」

「ねえ、今日は良い」と言うよ

「へえ？ 病気はかなり良いみたいだけ。退院のこと？」

「退院は、19日。でもそれじゃあなくて、あんたの進路のこと」

「ああ……進路ねえ。又落ちたら、今度こそ、『もう、諦めやー』とか言うんやろ？」

「違うがな、おかしな子」と母は言つてくすりと笑う。その笑いが永遠に続いて欲しいと、ふと芳人は切なくなつた。

小さい頃から常に兄雅人と比較していた父とは違い、母親は常に自分の味方だつた。どんな時にも、その柔らかな微笑みを絶やしたことがない。このよくな、大変な時でもだ。

「何だよ、お袋」

「最近、あんた、お袋つて言つんやね。芳人も大人になつたもんだわ」

「だ～か～ら、何だよ、良い事つて」

「芳人なあ……私立を受けてもいいねんよ」

「ええつ！？ 私立つて……でも……凄いお金、要るんやで」

と芳人は四人部屋の病室だというのに、素つ頓狂な声を上げた。

「知ってるがな」と相変わらず母は笑っている。

「お父さんと相談してん。あのな、わたしの保険金も入るかもしけんし、思い切つて田舎の土地売つてつて、な」

「でも、あの土地……老後資金の為に取つて言つてたやろ？ それに保険金つてなんやの！？ お袋の保険金なんか要らん！ それつて、生命保険なんやろ？ お袋が死んだ時に出るお金やろー…」

思わず、芳人はカーッとなつた。

「保険金とか要らん！ そんなもんより、お袋の命の方が大事や！」「ありがとさん」と母は静かに微笑んだ。「それは嬉しいけどな、まあ、万が一つで感じで言うだけやんか。とにかく、休耕田があるんなら、それを役にたたせた方がいいと思つただけやよ。深く考えんでもいいねん。あんたはちゃんとした医者になつたら、いいねん。それだけで、わたしは嬉しいねんから」

芳人は暫く声が出なかつた。ありがたいような、悲しいような、悔しいような、複雑な思いに捕われていたのだ。自分の頭が悪いからそうなるんだと分かつてはいても、そして、両親の痛いほどの気持ちを信じてはいても、それでもどこか納得行かなかつた。

「本当に……いいの？」

「当たり前やんか。親がしてやれるのは、もつそれぐらいしかないねん。お父さんも、分かつてくれたわ。だから心配せんと、私立も受けや。私立やつたら、どこか受かるんやろ？」

「」の最後の母の言葉は、芳人の誇りをちょっとひし傷つけはしたが、「うん、それやつたら何とか」と思わず本音を言つてしまつ芳人だつた。

「関東でもいいのんよ」

「え？」と芳人は再度驚いた。母は、友里菜のことを知つてはいるんだろうか……。

「いや……医大なら関西にするわ」と言つだけで精一杯だ。これ以上、お金を自分なんかに懸けさせる訳にはいかないという気持ち。「良かった」と安堵したような母親の声が、耳元の背後でしたような気がした。

病院から出た芳人は、最初努めて元気そうに明るく振舞つていたが、急に足が止まつた。

「おかん……俺、頑張るからな。兄ちゃんには負けへんからな。見ててや。そやから、長生きしてへな！」

鼻の奥がツンとした。

その頃、友里菜は真つ先に美術クラブの部室に入った。誰も居ないはずが、誰かが振り向く。

「あつ！」

それは洋平だった。

「ここは女子大だよ、大滝君」

「いいじやん。堅いこと言わいでよ」と事も無げにサラリと言つ

洋平の姿に、友里菜は戦慄を覚えていた。

34 何とかしてよ～！

のほほんと、女子大の部活室に鎮座している、他大学の学生、大滝洋平に唖然とした友里菜。

「日本へお出でですか？」
「はい、日本へお出でですか？」

「裏々門つて！？」と友里菜は、今にも湯気が立ちそうなほど怒り狂っていた。もちろん、微塵もそんな素振りは出さないが。

「あ、知らないの？ 男子なら誰でも知つて いるよ。裏門の近くに
ある、もう一つの秘密の門のこと。そうそう、寮に近いから君、知
つとくといいよ。何かで門限に遅れた時に、こつそりそこから入れ
ばいい。今度教えてあげる」

いた。

「怒った君もまた良いもんだな」と洋平は本性むき出し。見た目は、どうちかと言つと爽やかなのに、男子と言つものは全く理解不能だ。

「とにかく、一体何の為に来たのよ」

「決まっているじゃん、君に会いに、や。ケータイやメールだけじゃ、つまらないもん。それに」とやつ言つと、洋平はズボンのポケットから、何やら取り出した。

詩とかあ！？

「君に読んで欲しくて」

やあひまつじゅそ。じめまめ。

友里菜は不貞腐れたように、その紙片を取つて一応読んでみた。
相変わらず、陳腐な文章が並んでいた。「序は自筆のようだが、変に
丸字で、まるで高校生の女子の字面だ……。」

「ふうん、……、読んだよ。返すね」

「あ、それはさあ、君に捧げた詩なんだから」

「わたしに……捧げた！？」

「うおおお！ 時代がかっこいい！ いつこうの男子は、どうかつ
やいいのそ？」

「じゃ、一応貰つとくわ」

「ねえねえ、もう直ぐ戻るんだが、君」

「そりや、年末だもん」

「ねえ……僕も姫路で関西だから」

「だから？」

まさか、いつ……？

「一緒に新幹線で戻るつてのさ、じつま？」

「げー！ 来たよ来たよ。せだやだやだ。」

「だけど、わたし達そこまで親しくないもん。ちょっとと考えさせて
くれる？」

「ただ僕と一緒につづーのが嫌なの？」

「いや……つまり……わたし……（そうだ！）……大坂のカレシが多分駅で待っていると思うんだ。変に誤解されたくないのよ。大滝君とはただのお友達でしょ。でもそいつはさあ、一応カレシだから洋平の顔色が少しだけ変わった。元々ペールグリーンのよう、生白い肌なのだが、それがもつと白くなつていつたような……。

「そつか

「うん、そう。ごめんね」

「けど、僕は諦めないよ、柿沢さん。そのカレシって、まだ予備校生とか言つてたよね。まだまだ先の分からない小僧っ子じやん」「でも！……医大を受けるつて子なの！」と友里菜はムキになつた。

「ふうん。君は、医者とかに興味あるんだ。大体、女の子つて医者とか弁護士とか、そういうのに口口りと参るもんだからね、君も例外じゃ無いつてわけか。ま、F女はもともとそういう校風だけさ

「な、んて、嫌味な奴つ。芳人が医者になるから好きなんじゃないのに！ 医者なんかにならなくて、昔から好きだつたんだから。

友里菜が何か言おうとすると、運のいいことに他の部員が入つて來た。そして、やっぱり畠然として入口に立ち尽くしている。

「え？ どなた？」

「ごめん、わたしの友達。でも今帰るつて」と慌てて取り繕つ友里菜。

「そう、これから帰るところだから、安心して」
相変わらずしゃあしゃあと言い放つと、洋平は立ち上がり、ドアからさつと消えた。

友里菜は、樹理様が言つた「その人を、捨てるのね」と言つた言葉を思い出していた。

35 勝負の前に

友里菜は有紀の教会の礼拝には出なかつた。けれども、大学内では幻想的なツリーの点灯式があり、一足早いクリスマスの贊美歌による小礼拝があつた。そういうイベントが初めてな友里菜は、「ああ、これがホンモノのキリスト教主義大学のクリスマスなのか」と感じたのだった。

その後、友里菜は久し振りに新幹線に乗り、「のぞみ」で大阪に向つた。もちろん、大滝洋平と一緒にではない。けれども友里菜は、新横浜でキヨロキヨロと周囲を見回した。どこか洋平が不気味で、ホームのどこかに居るのではないかと不安だつたのだ。

折から、『ストーカー、若い女性を刺す』という新聞記事を読んだばかりだつたからだ。

「まさか……だよね」

友里菜は独り言を言うと、新幹線に乗り込んだ。その途端、メールが来た音！ ぎくりとしてケータイを見ると、

「今から大阪に帰るんだね。気をつけてね」と言うメールがあるではないか！ 送つた人間は……大滝洋平！！

「まじい！？ こわ〜〜」

偶然だと思つたが、それでもやはり不気味だ。けれども気を落ち着けて座ると「のぞみ」はあつという間に新横浜を出発した。

乗つてゐる間中緊張していたが、友里菜はいつの間にか意義他なく寝てしまい、気づいた時には既に京都だつた。

乗る前まで標準語、降りる時には関西弁、といつの間にか友里菜は日本語の“バイリンガル”が身についてしまつたようだ。いつもよ

り雑踏の激しい新大阪から、友里菜はちつよびり懐かしい我が家へと向つていた。

その頃、芳人は塾へ急ぐ途中で、メールの音に気付き直ぐにケータイを覗くと、

『今着いたとこ 友里菜』とあり、思わずニヤニヤしてしまった。友里菜が、自分が知らない間に、他の男子とデートしているのも知らず、相変わらず純真な芳人は……と言うより、他人を疑うヒマさえない浪人生の芳人は、医大の出願の日を迎えていた。今日は、その確認の面接があるので。

「いかん、いかん、デレデレしても、友里菜には会えへんぞ。もう直ぐなんやからな、入試は。けど、2000年に入試やて、なんか、世紀末という感じやなあ～」

「芳人っ」と突然背後から呼びかけられて、塾の階段を登ろうとしていた芳人は、その覚えある暖かい声に振り向いた。

淳平がへらへら笑つて、立つていた。

「なんや？ なんか、嬉しそうで。なんや良いことあつたんか？ 今日みたいな大切な日に？ あ、ひよつとして、カノジョ戻つた？」
「うん、まあな」と芳人は照れて、慌ててケータイを仕舞う。ずんぐりした、まだスタイリッシュとは程遠い形の頃だ。

「良かつたよ、芳人と同じ私大の入試が出来て。親父さん、随分無理したやろ？ うちの父なんて、子供の頃から『私大入試用資金』と銘打つた貯金しててんから。準備いいよな～、それに『私大用』つつーのが、なんか気に食わんけど、でも息子の頭の程度をその頃から考えとつたんは凄いわ」

「妙な誉め方！？」と芳人は茶化した。
「でもな、淳平、僕な……私大でもどこか不安やねん。なんか自信ない」

「自信ないのは、誰でもや」と淳平は言った。「一浪、二浪なんて誰だつてしたくない」

「医者になるなんて、そんな無茶なこと言つた罰やな」

と芳人は氣弱に咳く。

「とにかく頑張らなしゃーないやん。もうジタバタできへんで」

そう明るく言つて、淳平はポーンと芳人の肩を叩いた。

「絶対に一人とも受けろうや!」

「うん」と芳人は勢いよく応えたものの、その実……。

けれども、それまではまだまだ序の口だった。

鬼の高橋と言われている、例の数学教師、高橋先生との面談では、芳人はコテンパンにやられたのだった。

高橋先生は、片手でボールペンをクルクル廻す癖がある。そして苛々するほど、そのスピードは速まるのだ。

芳人が先生の前に座つた時、そのスピードは頂点に達していた。「大久保かあ」と先生は素つ氣無く言つと、上目遣いで芳人を眺め回す。

「あんな、大久保。私大に決めたんは正解やつた。この点では到底国立は無理やからな。けどな、私大を舐めたらあかんのや。これで入れるとでも思つとるんかあ、大久保!」

「だ、ダメですか……」

高橋先生は、ボールペンを田にも止まらぬ速さで廻しながら言った。

「ま、五分五分つてとこかな。一浪も覚悟しつけよ」

芳人は愕然としながら、重い足取りで家路に着いた。

友里菜から来た『正月は会おうよ』という嬉しいメールも、芳人の気持ちを明るくはしなかつたが、ただ一つの光明は、年末に母親が退院したことぐらいだった。

結局、大晦日まで塾に缶詰になつていった芳人は、友里菜とは正月の一日に会つた。

その日友里菜は、出来上がつたばかりの振袖を朝早くから着せてもらい、少しドキドキ、幾分ルンルン気分で芳人の家に出かけた。確かに、訪問は初めてのような気がする。中学時代に住んでいた町なので、何度も見ていたし、大学前に一度訪問した家なのに、いざ再び門をくぐるとなると、おつかなびつくりになる。

けれども、暖かい微笑の芳人の母親に救われた気がした。どこが重大な病気なのか、外見からは全然分らないのだ。いや、分らなく振舞つているのかも知れないが……。

「あの……わたし、お約束していた柿沢……」

「友里菜さんね」と芳人の母親は言い継いだ。

「おや、早かつたやんか」と母親の背後から、のつそりと芳人が現れた。もう既に外出の格好だ。

「じゃ行つて来る」

「あら、お茶でもどうお?」と氣の良さそうな母親は言うが、芳人は照れたように慌てて外に出たのだった。

そして今度はびっくりして、目の前の振袖姿の友里菜を見つめた。

「ありやー、すごいなあ! もつすっかり……」

“女やなあ”と言つのを、芳人はぐつと飲み込んだ。

「じゃあそれでは、、、、」と友里菜はなにやらもぐもぐ言いながら、丁寧にお辞儀をして芳人と共にその家を後にした。

角を曲がった途端、芳人は堪えていた情熱のはけ口を手に全て込めたかのよう、友里菜の手をぎゅっと握り締めた。

「なんやあ、友里菜が着物着てくるなんて、早う言つてくれてたら、僕もちつとはマシな格好するのにな」

「芳人はどんな格好でも、いいんよ」と友里菜は芳人を見上げた。今は“下町のプリンス”も“ストーカー君”的ことも忘れ果てていた。

「にしても、今日の友里菜……なんや見違えたわ～。綺麗やなあ～、大和撫子やなあ」

「何言うてんの」と友里菜は握られていない方の手で、芳人をぶつたたく。その感触の硬さに、ふと『芳人だつて、もうれつきとした男じやないの』と感じる自分が居た。

二人は京都の河原町から、八坂神社、そして参拝人で身動きできない清水寺に行つた。

「な、芳人、おみくじ引く？」

「おみくじ？ なんか嫌やなあ～」

「じゃあ無理せんぞいて。わたし引くけど」

友里菜が引いたおみくじは『小吉』だった。

「あ～あ、まあ今年もこんなものかな～」と溜息をつく友里菜を見ていると、芳人は急に自分も引きくなつてお金を払う。けれども、それが芳人の大後悔の一つとなつたのだった。

「あ！」

「なに？」

「『凶』や……」

「ええつ！？」と友里菜は叫ぶと、「いいのよ、わたしそれをあの木に結わえ付けて、厄落しするから」と芳人からそれを引つたくなり、素早く近くの木の枝に結びつけた。その木や隣の木には、無数の白いおみくじの紙が結ばれている。

それから友里菜は結びつけた『凶』のおみくじをパツと下に落とした。

「さあ、もう大丈夫」

「けど、なんや嫌な感じが残るなあー」と芳人はそれでも氣になつていた。

「もう直ぐ入試やのにな。引かなきや良かつた

「なんやの、男らしくない!」

そう言つ友里菜と共に、芳人はうどんを食べた。そのほかほんた昆布だし入りの醤油の汁の匂いが、やつと芳人を落ち着かせた。

「なあ友里菜」と芳人は言い始める。

「なに?」

「僕、誓つことがあるんやけど……聞いてくれる?」

その真剣な瞳に、友里菜はハツとして箸を置いた。

「うん」

「今度の入試は絶対に失敗できへんのや。でももしも、もしもやで失敗したら……」

「……したら?」

「僕……成功するまで、友里菜とは会わへんつもりなんや

「え」

友里菜は絶句した。

「そんなん、弱氣でどうすんのよ」

「いや、そやないて。そつじやなく、ほんまやねん。それぐらいに真剣にならへんと、僕は入試に臨めんのや。分るかな、友里菜には? 友里菜は遠くの女子大で、青春謡歌しとるんやから、分らへんかもしけんけど」

そう言つと、芳人は袂から出でている友里菜の白い手の上に自分の分厚い掌をそつと置いた。

「誓わせて欲しいんや」

友里菜はじいと芳人の目を見つめた。そのそんなに大きくな無い目は、けれども必死だと、幾ばくかの哀しさが宿っていることに気付いた。

「分った」と友里菜はキッパリ言う。「でも、そんなことは無いと思わよ、わたしは。氣いをしつかり持つてね。祈つてるから」芳人は無口だったが、首を微かに何度か下げる。

37 我が麗しのティーバ

37 我が麗しのティーバ

芳人との正月デートは甘辛かつた。

友里菜は芳人の真剣な誓いを胸に、横浜に戻つて行つた。そこでは、相変わらずF女の奇特な面々が居るべき場所に鎮座しており、友里菜はどこかほつとしたのだが。そしてその内に、友里菜は芳人のことも忘れ、自分の期末試験の方に没頭していった。

期末試験が、ペーパー、実技共に無事終了した頃（とは言つても、友里菜の成績はそれほど良いとは言えなかつたのだが）、久し振りに芳人からメールが来た。そこには、ただ一言、「全滅」という文字だけが打たれてあり、友里菜は大いにショックを受けた。

絶対に今度は受かるはず、と思い込んでいただけに友里菜の失望は大きく、又芳人本人の絶望感はいかばかりか、と想像するだけで胸が塞ぐ。再び医大にトライするのだろうか？ もしもそうなら、二浪ということになるが、どちらにせよ辛い選択には違いない。

芳人は馬鹿では無いが、ペーパーテストに弱いところがあるかも知れない、とは友里菜は中学時代から思つていた。いわゆる“秀才”ではないのだ。けれども、医者になるには、ただ秀才だけではダメなのも確かだ。志、心、技も必要で、何より患者にとつて、暖かい医師でなくてはならない。そういう点では、芳人はピッタリだと思うのだが……如何せん、やっぱり試験は試験。通らなくちゃ、意味が無い。

友里菜は、さぞ母親がガツクリしているだろうと察したし、秀才の兄のイライラぶりも感じていたせいか、どういう言葉をかけてよいか分らず、ケータイをもてあましていた。掌で転がしながら、言

葉を選んでいたところ、着メロが鳴った。

「大滝洋平！ うつづく！ 何だよお」

渋々耳に当てる

「柿沢さん」とこう例によつて甘じ囁くような声が聞こえる。

「はい、わたし」

「どうして知らせてくれなかつたの…？」

「はい、何のこと？」

「今度の発表会のこと」

発表会とは、2月末の佐藤教授門下生の声楽の発表会のことだろうか？ でも、なぜ？

「あの～、それって」

「そう、緑ホールの小ホールであるやつ。F女の佐藤先生の門下生のコンサート。君も出るんだよね？」

「あ……うん」

「じゃ、僕行くから。誰が来てもいいんでしょ」

「うん……500円さえ払えば」と気乗りしない友里菜は言った。

「ワンコインでコンサートを聴けるなんて。それも、君の歌声を！ う～ん、楽しみ～～」

わー、なんか嫌味っぽい言い方！

「で、でも、なんでそのこと知ってるの？」

「今は、何でもネットの時代だよ、ネットのと洋平はのたまつ。「ちゃんと載つてたよ。君は僕のディーバ（歌の女神）だからなあ」

よくも言つよね、あつかましい！

ケータイを切つた後も、何だか嫌な感じが残つた。

再び深呼吸をして、ケータイを取るとまたまた着メロ。

「今度は誰よつ。うつ、仲本君！？」

友里菜は再度ケータイを耳に当てる。

「もしもし、柿沢さん？ 今、いい？」と、気弱そうな寛之の声がした。イケメンなのに、どうしてこんな自信の無さそうな声を出するのか、友里菜はそこがどうも気に入らないが。

「いいわよ」

「あのさー、友人から聞いたんだけど……君つてどこかで歌歌うんだよね」

「ありやー！ 又か！」

「うん、そうだけど」

「やつぱりそうか。友人のカノジョがF女で、会報に載つていたつていうから、君もかなつと思つてさ」

「ええ、まあ。大した歌じやないけど、一応モーツアルトのオペラからのアリア」

「うわー、凄いなあ！ 行つてもいいよね」

「え？ あ……ええ」と曖昧に答える友里菜だつた。

「良かつたー、一度そういう場所に行つてみたかつたんだよ。そういう華やかな場所に」

「全然華やかじやないけど……まあ一応、みんなドレスとか着てるし」

「いいねー」と寛之は、うつとりと囁く。「じゃ行くから、いいよね。君つて、ディーバなんだね」

「あ、はいいいい、どうぞ。でもディーバつて囁つほびじや……」

つて、どうすんのよー もしも一人が知らずに来て、並んで座つていたりしたら！？

友里菜の心は恐慌に陥つて、とても芳人どころではなくなつてい
き、遂にその日は芳人にはメールの返事すら出来なかつた。

とうとう、友里菜からは何のレスもなかつた……。

「全滅」だけしか書いていない態度が、友里菜の自尊心を傷つけたのだろうか。けれども今は、芳人はそれしか書けないのだ。

「全滅」「殲滅」「大失敗」「敗北」「負けた」「落っこちた」「もうあかん」……脳裏に浮かぶ言葉と言つたら、それしかない。

反対に、羽島淳平は、やつと私立の一校に合格した。大阪と関東にある私立で、決して全国的に知られているほどではないが、かろうじて面目を保ち、やつと父親に認められたのだった。

けれども、一緒に見に行つた大阪の私立医大にも、親友の芳人の名は無かつた。それが最後の砦だつたというのに……。

「わーー、あつたーーーー！」と叫んだ後、淳平はハツとして横の芳人を見つめたのだ。そして心優しい淳平は、芳人の前で歓喜の叫びを上げてしまつたことを恥じた。

芳人はガツクリと肩を落とし、無言だつた。

しまつた！ 芳人、落ちてもうたらしい……。

淳平はオロオロしたが、けれども直ぐに芳人の方から声を掛けた。

「良かつたな、淳平」

「う、うん、まあな、ありがとう。けど」

「もう言わんといてや！」と芳人は精一杯虚勢を張る。「まあ、実力無いからしやーないな

「何か、済まん気持ちや」

「そんなことないつて。さあ、ぼちぼち帰ろうか」

「手続きしてから、帰るわ」

本当は一人の合格を確信していたので、帰り道には酒場に寄つて、祝杯を挙げるつもりだったのだ。けれども、あてがはずれた一人は、何とか自分達の心を誤魔化しながら家路を急いでいた。

芳人は、暗い谷底に落ちていくような気がした。まさに、「奈落の底に落ちる」とは、じつにう事を言つのだらうか？

「な、淳平。お前の祝杯を挙げてから帰るつや」

「けどお……」

「いいやん、いいやん。俺達、19歳には見えへんから」

「そーいう事じゃなくて」

「例え未成年でも、気にしいへんような店に入りたいな」と芳人はひきつた微笑を浮かべながら言つた。淳平は、芳人の気持ちを察すると、近くの酒場に入った。

中はまだ夕刻前のせいか、そんなに人は居ない。ちょっと柄の悪い店だつたせいか、一人の年齢など気にも留めていないようなのが幸いだつたが。

「あんちゃんら、何飲むん？」と店のオヤジが尋ねた。

「ええつと、、、、酒！」と芳人がイの一番に言つた。

「日本酒？ ええ酒あるでえ～」

「いや、安いのでいい」

「ほんまか？ 悪酔いするで～。ナビ、学生さんのようやから、お金無いねんな」

店のオヤジは、コップにとくとくと酒を入れた。

「あのう……僕は、水割りでいいから」と淳平がおずおずと言つと、

「あんちゃんの方は、酒弱いんかいな」とオヤジは察する。

「何があつたんやろな、お隣さんは」「うん、まあ、なんちゅーかな……」

淳平が躊躇つていると、

「カノジョから嫌われたんや」と芳人が勢いよく言い放つた。
「おいおい、それはないで」と淳平がたしなめるが、芳人はもつやけくそになつていた。

「そうやで。だつて返事もないもんな。普段やつたら、友里菜、直ぐにレスしてくれるのに。どうせ、どうせ、俺みたいなへぼい奴は、気にいらんのやろ」

「そうかあ、あんちやん、オンナに捨てられたか。結構いい男なんやけどな」

「まあ、オンナという程のものでもないけどさあと芳人は意氣がる。「けど冷たい奴やわ」

「なあなあ芳人、もう酔っ払つたん?」

「気にするなつて。今日は、もうどんどん飲んじやるわい!」

「はー、厄介なことになつちまつたよな」と淳平は呟いたが、内心、友里菜に対する不信感を抱いたのだった。

芳人は、もうあのカノジョとは、別れた方がいいのかも……?

そう感じた淳平は、横で芳人が汚いカウンターに突つ伏して、泣いているのに気付いた。大柄な芳人の肩が上下に震え、涙を見せまいと両手で顔を隠しながら。

「おやおや、あんちやん、よつほど堪えたんやなあ。まあ、今晩は大いに飲んで、憂さを晴らしいや。人生、山あり谷ありやで」

芳人はこの言い古された言葉を、初めて肌で実感したのだった。

39 今宵は発表会

39 今宵は発表会

まだ肌寒い早春の宵、友里菜と有紀の担任教授、佐藤先生の門下生達の発表会が行われた。一応、ワンコインの入場券が発売されに入るが、所詮は門下生達 みなセミプロか大学生達の発表会で、「コンサート」と銘打つのも恥ずかしいぐらいだ。

けれども、一応「桜会」と名付けられた毎年開かれるコンサートで、家族のみならず一般人達もちらほらとは居る。もつとも、八割がたは家族や友人達と言つた知り合いばかりなのだが、音楽を志す学生達は、必ずこういう場が必要なのだ。

それは、度胸を付けると言う意味もあるし、佐藤教授の門下生達が如何に多いかを知らしめるためでも有る。けれども結局は、知り合い達の集まりで、和気藹々としたものだ。

いっぽしの音楽家ぶつっていても、まだまだひよつ子に過ぎない若い女性ばかり。その中では、佐藤教授はやはり貴祿がある。大昔（？）はオペラにも出ていた事があるとは言うが……友里菜達の生まれていない頃なので、あまりはつきりとはしない。少なくとも、「わたくし、『カバレリア・ルスティカーナ』のサントウツツア（*1）を歌つたことがあるのよ」。お相手のテナーは、昔は有名だった何々さんで……」と言うのが、佐藤教授のご自慢だった。
とにかく、どこかの教授の門下生にならなければ、なかなかこのクラシックの歌の道は遠いのが実情だ。

けれども、その日、緑ホールの小ホールにやつて來た友里菜は浮かない顔をしていた。手には、着替えるべき衣装を持ってきてはいるが、表情は冴えない。

「あれ？ 今日のカツキー、ビニ」か変」と早速お化粧中ののりつちが気付いた。

「え？ そう お？」

「そうだよ。いつものカツキーらしくないって」

「うふふふふ。実はね、これには訳があるので」と、悪戯っぽく有紀が囁く。

「やめてよ、ゆつき」

と慌てて遮る友里菜だが、もとより有紀が聞くはずが無い。

「なになに？」

「あのさ、今日、カツキーのカレシ一人が揃いも揃つて、雁首下げてやつて来るの」

「はあ？」

「やめてよ、一人とも！ あの人達つて、カレシじやないから！ 何だかネットで見たりして、招待もしていないので勝手に来るんだつて！」

「何よ、ムキになつて。だよね～、カツキーのカレシつて、将来のお医者様なんだもんねえ」と、少し羨ましそうなのりつちだ。

「違うわよ」と言ってから、友里菜はしまったと思う。

「まだわたしにはカレシなんて居ないつて！ それに……大阪のあの幼馴染、落ちちゃつたから、又医大に再挑戦するか分んないの」

「ありやああ、そだつたんだ」とのりつちが舌を出した。

「その通りよ」と経緯を知っている有紀が、めつと睨む。

「とにかく誰が来ようと、頑張りましょ。テストではないけど、やっぱ、緊張するし」

そんな声を聞きながら、友里菜は自分で選んだ白いレースのドレスを着た。

「わあ、綺麗ね～。このドレス！」

「やだ～、のりつちつたら、わたしの事じゃないの…？ ドレスの

』となの?』

「本番前は、余りだみ声は出さないよ」 と慎重な有紀がたしなめた。

「ゆつきは、高音が綺麗に出せるから、プッチーの『ラ・ボエ

ム』のマゼッタのワルツね。いいよね、あれ(*2)』

「いつか、『ランメルモールのルチア』の狂乱の場、を歌いたいわ

(*3)』

「出来るわよ、ゆつきなら』

「いいなあ、二人とも才能あつてさ。あたしだけは、まだベッリー二の歌曲だもん』

とのりつちはふくれた。

「ところでのりつち……もち、あんたのカレシ、来るよね」「決まつてるじゃん!」と得意そうにのりつちは宣言した。しけた小ホールなので、もちろんカーテンなどは無いし、歌う生徒達も終われば、聞くほうに廻るのだ。

一年生のこの三人は、比較的早い番に終わってしまうので、三人は舞台の袖で今か今かときよどつていた。

ちらりと観客席を覗くと、友里菜は途端に「つぐり」と喉を詰らせた。

「ちよつとまー、どしたの?』

「ゆつきー、あの二人、来てるうーーー』

「あ、やつぱりかあ』

「それも、どっちも正面の舞台に近い方に陣取つてゐよ。席も近いし……どうしよう』

「どうしようつて、歌うだけじゃんか、わたし達つて』

「何かあつたんですか?』と伴奏担当の小嶋というクラスメートが覗き込んできた。

「いや、あ、別にい」と友里菜は手を振る。

「ほらほら、もう直ぐ開幕だから、カツキーもその辺で引っ込もうよ」

とゆつきは無理やり手を引っ張つていく。

いよいよ始まり、のりつち、友里菜、ゆつきの三人は無事歌い終わった。けれども、友里菜の番に、思わぬことが起つたのだ！

友里菜がモーツアルトの『フィガロの結婚』の中の、スザンナのアリア（*4）「とうとうこの時が来た」だったが、それが終わるや否や、舞台にスススーっと駆け寄る人影があつた。なんとそれは……大滝洋平。それも、手に花束を持っており、さつと差し出したのだ。

「あ！　えつ！？」

（うつそー！　まじい？）

友里菜は大いに慌てたが、舞台の上ではその素振りは見せず、にこやかに微笑みながらそれを受け取つた。

「良かつたよ！　素ん晴らしい」と囁く洋平に、

「あ、あ、どうも……」

そう言いつつ、チラリとへたれプリンスの方を盗み見ると、寛之は唖然として洋平の芝居がかつた気取つた行為を見つめているだけだつた。

*1『カバレリア・ルスティカーナ』田舎物の騎士

マスカーニ作曲のシチリアを舞台にした、三角関係の悲劇。間奏曲は、かなり有名です。

サントウツツアは、捨てられた女の役で、かなり重厚なソプラノ、ないしはメゾ・ソプラノ。嫉妬の余りチクリ、愛する人

を殺されてしまう、結構犯罪性の強いオペラ。

* 2 『ラ・ボエーム』ボヘミアンたち

プッチーニの有名なオペラ。貧乏な若者達の愛と別れを描きます。ムゼッタはその脇役で、高音のアリアが有名です。

* 3 『ランメルモールのルチア』

ドニゼッティの、悲惨極まりないオペラ。政略結婚の為、狂つてしまつたルチアが歌うハイトーンボイスの難曲が、「狂乱の場」と呼ばれます。

* 4 『フィガロの結婚』

御存知、モーツアルトの代表的なオペラ。フィガロの婚約者の、可愛らしい小間使いスザンナに横恋慕した、女好き伯爵を懲らしめようと伯爵夫人は画策し、小間使いのスザンナをニセ伯爵夫人に仕立て上げる。結局、最後はハッピーエンドとなります。

40 初体験

芳人はすっかりいじけていた。春休みに戻るという友里菜のメールに返事もせず、ぐだぐたと自室に籠つて、食事以外出て来ないのだ。

我ながら情けないと思つ。けれども、どうしようもなく暗く、心が折れ、心配した淳平の電話にも出ない。そしてこれからどうすべきか、決められないことが一番芳人を鬱状態にしていた。

「まあ、失敗は若い内は、買つてでもせい、て言つしな。又挑戦したらええやん」

と言つ母親の言葉にも、イラつく芳人なのだ。

「お袋、もうあいつの事はほっとけって」

と兄の雅樹が呆れてたしなめると、母親は「そやな」とポツリと言つて黙り込むのだった。そのしょんぼりした姿を見るのが嫌で、芳人は益々自己嫌悪に陥つていた。

そして何より芳人に重く圧し掛かっていたのは……この先どうするかと言つこと。もう一度だけ挑戦するのか、それとも進路を変更して、無難な道に行くのか……。

両親は、先祖代々の丹後の田畠を売ればお金は何とかなる、と言つてくれたが、その問題だけではなく、将来の道をこんなあやふやなままでいいのか、という自問自答だった。

「ちつ、あいつになんかお金を掛けても、どうせ何の役にもたへんから、結局無駄やわ。そんなもんに使うより、自分らの老後に使えばええやん。どうせ、親父の不動産業も今の不況で大したこと無いし、年金もそんなに有らへんやろ」

と雅樹は言つ。確かに、兄の言つ方が正論だ。盆暗息子に大金を賭けるのは、まるで博打だ。

けれども、芳人はもう一度チャレンジしたいと言つ未練もあつた。それは自分だけの未練ではなく、このままだと、何となく友里菜が自分から離れて行つてしまいそうだったからだ。

芳人は怖かつた。そして不甲斐ない自分が歯がゆかつた。

「僕、ちょっと外に行つて来るわ」とまだ早春の晩、芳人はそう母親に言い捨てて、出て行つた。「あ、そう」と言う母親の声が背後でしたように感じたが、芳人は敢えて振り向かなかつた。

入試に全敗しても何も責めない母親の顔を、まともに見ることさえ出来ない自分に、本当に腹が立つ。

芳人は行く宛ても無いのに、ふらりと夜の歓楽街をさ迷つていた。

着信の音がする。

「誰やねん?」

ケータイを見ると、それは従姉の美里だつた。

「ああ、美里ちゃんか……。もしもし」

「芳ちゃん?」と懐かしい美里の声がした。美里が自分の哀しい恋バナを話したのは、もうずーっと昔のよつたな氣がする。

「うん」

「もしもし、芳ちゃんか。大丈夫?」

心から心配している声音だ。

「うん……ぼちぼちやな」

「力無いなあ、あんたらしくもないで」

「そりや当たり前やろ」

「怒らんといつてよ、確かにそやなあ。で、今どい? 叔母さんに電話したらどこかに出て行つたつていうから」

「うん、ちょっとね」

芳人は居場所を告げた。

「じゃ、あたしそこに今行くわ」

「ええっ！」

「しょんぼりした従弟を慰めるつて言うのんも、又いいもんや。この前は、わたしが慰められたしな」

「今から？」

「まだ8時やんか。待つててな」

ケータイは切れた。芳人は仕方なく、近くの駅の改札口に突つ立つて待っていた。忙し（せわし）なく道行く人々が、皆楽しそうに見え、芳人は自分の卑しさに益々腹が立っていく。

けれども、改札口に現れた美里を見つけると、その妬ましげな思いは消えた。それ程、美里は以前と比べて輝いて見える。そして、艶っぽく艶かしい。明らかに大人の女というオーラが出ていて、芳人はハツとした。

「待たせた？」と甘酸っぱい美里の声が、芳人をくすぐった。

「いや、あんまし」

「何か食べる？」

「いや」と言いよどむ芳人。

「ねえ、美里ちゃん」

「何？」

「この通りの裏つて……ラブホ街なんやね」

「そう、みたいね。でも、どうしたの、今日の芳ちゃん。何かあつた？ それとも、入試の失敗で……」

「な、行こ」

「は？」

「僕やつたら、いや？」

美里はまじまじと芳人を見つめる。

「どしたの」

「あんな～、もう僕な～、童貞捨てたいねん！」

「本気？」

芳人は黙つたまま頷いた。

「分つた。あたしでいいんなら。最初のオンナが。でも、カノジョ、居たんでしょう？」

「友里菜とは出来へん」とポツリと芳人は呟いた。

「じゃ、行こ～うか」と美里は言つと、歳よりも老けて見える芳人の腕を取つた。

「絶対に後悔しないと約束するならええけど」「約束する」と芳人は短く答えたのだった。

41 さよなら、四年生！

41 さよなら、四年生！

何度もかの電話をした後、友里菜はケータイを置いた。

「あれ？ やっぱり、カレシ、出ないの？」と、樹理様がのたまつた。今晚は、ルームメイトの樹理様こと、四年生の木川田樹理の送別会なのだ。最初、ルームメイトだけでの送別会が有り、それから寮全体の送別会が有る。

各ルームだけでの送別会は様々で、飲兵衛の先輩では飲み会となり、下戸の送別会ではひつそりとレストランでのお食事会、賑やかな先輩の時は、カラオケで騒ぎゲーセンに行く時もあるらしい。

幸いなことに、樹理様はおしとやかな金沢の令嬢で、下戸。よつて、友里菜のルームメイト三人は、都子のお勧めのイタリアン・レストランに来ていた。まだ「女子会」とは呼ばれていない頃だが、三人は少しばかりのワインに酔いしながら、女子大生にはちょっと敷居が高いレストランで、だべつていたのだ。

「芳人……どうしたんかなあ？ 入試に落ちたって、メールにはあつたけど」

「へこんでるんやない？」と都子が問いかける。

「かもね。でも……水臭いわあ」

「それはね」と樹理様が続けた。「カレシ、あなたに顔向けてできないのよ」

「だつて……」

「ちゃんとした医者になるのだつて、数年掛かるのに、まだまだ医大にも入つてないなんて、やつぱり恥ずかしいとか劣等感とか情けないとか、思うわけよ」

「男の沾券にかかるつてわけですか？ でも、わたしはそんなこと

考えて無いのになあ～」

「それだけ、あなたを愛してゐることじゃない？」

「……でしょうかね？」と友里菜は怪訝な顔だ。どうも、今までの芳人らしくない。

「ま、いいか。今日は、思い切り楽しみましょ。ごめんね、わたくし事で」と友里菜は気を取り直した。

「明後日はいよいよ卒業式だなあ」と都子がしみじみと言つた。

「今まで、色々お世話になりました、樹理様」

「ほんと… 途中から入つたわたしにも、色々氣を使って下さつて、ありがとうございます」と友里菜も頭を下げる。

「なに、改まつてんのよ、あんた達！」

「だつて……」と都子はもう涙目だ。「わたし達、後輩つて、女子大に入る時には、何だか別世界に来た氣がしたし、いけず（意地悪）とかされたりするんじゃとか、シカトとかつて考えてたから……けど、全然そんなこと無くて……」

「ありや？ 都子はもう酔つちゃつた？」と樹理様。

「あんた達もいつかは、“様”つて呼ばれる頃が来るわよ。何だか、楽しみね。ホント、四年間つてあつという間だつた。わたしも、良い思いでが多いしさ」

「あの、樹理様は金沢に戻るんですか？」と友里菜。

「一応ね。でも、あつちに仕事は余り無いと思つわ

「じゃ……又、関東に？」

「ねえ、カツキー。最近F女に限らず女子大つて、結局付属の中高の生徒達は、皆、T大とかW大やK大よね、行くのは。だから、女子大からつて言つと、団結心も強くなるわ。地方出身が多いから。ま、金沢に来る時には言つてよね。大した都市じゃないけど、案内するわよ」

「その前に、多分樹理様は、地方の良家にお嫁入りしているかも」

と都子が淋しげに言う。やがて、都子はすっかりワインに呑まれてしまい、大トラになつてしまつて、あの二人が都子を連れ帰るのに難儀しつつ結局タクシーで寮に戻つたのだった。

翌朝、二日酔いの都子と友里菜は、寮の主宰のお別れ会に出た。個性的でボーアイツシューな良子様やその他の先輩達が、前列に居並ぶ様はちょっと壯觀だ。皆普通の格好だが、やはり大人っぽい。

既に婚約者が居る先輩も居れば、キャリアウーマンとしてこれらからバリバリ働く先輩も居る。友里菜にとつては、眩しいような気がするし、遙かに先のような気もした。けれども、その時は案外直ぐそこかも知れないと、そう思いもする。

賛美歌の調べと、そしてお祈りの後、楽しいそして騒がしく、かつ又ちょっとぴり淋しい送別会が、精一杯のブッフェ・スタイルで行われた。

そしてその翌日は、卒業式。友里菜達音楽部は、器楽科は伴奏、そして他の生徒達は歌で卒業生を、盛大にそして厳かに送るのだ。会堂の二階に陣取る友里菜達は、旅立つ卒業生を見下ろしていた。「はー、もう一年経つちゃったんだね」と、隣の有紀が囁いた。「早いもんだわ。ねえ、人生もこんなに早いのかな?」

「何言つてんのよ、ゆつき。わたし達つてまだまだじゃない?」

「そつかなー? でも、先輩達つて、凛々しいよね」

「うん……そう思う」

そつと友里菜は呴く。その莊厳な式に臨む友里菜は、芳人の浮気を知るはずも無かつた。

「さよなら、先輩達!」と友里菜が呴くと、のりつちは涙目で頷いた。青春は、かくも早く過ぎて行くもののようにだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9687k/>

過ぎ去りし日々～大学編～

2011年11月23日12時57分発行